

---

# 魔法勇者ライディーン

sibugaki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法勇者ライディーン

### 【Nコード】

N4237P

### 【作者名】

sibugaki

### 【あらすじ】

30年の月日を経て再び蘇った妖魔帝国  
それに対抗する為に長い眠りにっていた勇者「ライディーン」が  
今日を覚ます

時期的には無印編をイメージしております

長谷川先生の書いた漫画「ゴッドバード」を読んで書いてみました

予告（前書き）

懲りずにまた新しく投稿しました

## 予告

今から約30年前、地上では妖魔帝国と名乗る巨大な勢力が地上をその手にしようとして進攻を開始した

これに地上の戦力は対抗するが妖魔帝国の化石獣に対抗出来る筈も無く苦戦を強いられる

しかし、それを打ち碎いた物が居た

それは1万2千年前に古代ムー帝国が作り上げたスーパーロボット

「ライディーン」であった

ライディーンは地上に住む人々を守る為に妖魔帝国に果敢に戦いを挑んだ

その戦いの中、多くの犠牲を孕んだ物の、ライディーンは見事妖魔帝国を壊滅させる事が出来た

それから30年の月日が流れ、今再び勇者が目覚める

『魔法勇者ライディーン』

次回予告

30年の月日を経て再び蘇った妖魔帝国

蘇った妖魔帝国は町を破壊する

しかし其処へかつて妖魔帝国を滅ぼした勇者もまた蘇る

次回、魔法勇者ライディーン

『蘇る勇者』

次回もこの小説にフエエエエド・イン！

## 予告（後書き）

次回は第1話を投稿する予定です

## 蘇る勇者（前書き）

第1話です

かなりオリジナル要素満載です

## 蘇る勇者

最近何時も同じ夢を見る

それは若い女性の声で何かを伝えて来る事でも、その声の人を私は知りません

だって聞いた事も見た事も無い人ですから

緑色の長い髪に澄んだ瞳をした綺麗な人です

そしてその人が何時も私を見てこう言うのです

『再び、悪魔が蘇る・・・ラ・ムーの血を引く者よ、今こそ勇者を、勇者を目覚めさせるのです』

こう告げるのです

一体勇者って何ですか？

そもそも貴方は誰何ですか？

私は何時もそう聞きます

でもその女性は何時もそう言って消えていくのです

一体何だろう？

悪魔って何？

勇者って何？

そして、何で何時も私の所に来るの？

そう疑問に思っているとは何時も朝になります

「ああ、また何時もの夢か・・・」

多少落胆した声で少女「高町なのは」は呟いた

## 第1話「蘇る勇者」

彼女は高町なのは、今年で9歳になる小学3年生である  
家族は両親に兄と姉の四人家族の末っ子である  
特に家族間に不満も無く過ごす極普通の少女である

「おはよう!」

何時もの如くなのはは両親に声をかける

それを聞いて朝ごはんの仕度をしていた母と机に座って新聞を読んでいた父がなのはを見て笑顔を浮かべる

母の名は「高町桃子」そして父は「高町士郎」二人とも笑顔でなのはを迎える

それから暫くして汗拭きタオルを首に巻いた兄の「高町郷也」と姉の「高町美由紀」がやってきた

四人揃ったところで皆手を合わせて「いただきます」と言って食事を始める

そこでののははふと毎晩見る夢について話した

「あのね、私何時も同じ夢を見るの」

「ふうん、どんな夢だい?」

朝の食事を楽しみながら父が聞く

「えっとね、見た事ない女の人が「再び悪魔が蘇る。ラ・ムーの血を引く者よ、勇者を目覚めさせるのだ」って言うんだよ。変だよね

え  
」

なのはが薄笑いを浮かべてそう言う  
しかしそれを聞いた士郎は盛大に口に入っていた物を吐き出す  
そして咽る

「ど、どうしたのお父さん!!!」

「貴方大丈夫？」

俯いて咽る父を母が優しく背中を摩り子供達が心配そうな顔をした

「ゲホツ、ゲホツ、な、なのは・・・その女の人はどうな人だった  
？」

涙目になりながらも士郎はなのはに聞いた  
それを聞かれてなのはが顎に指を置いて思い出す

「えつとね・・・緑色の長い髪にとっても綺麗な目をした女の人だ  
よ」

「!!!!!!!」

それを聞いた士郎は目を大きく見開く  
それを見た郷也が肩眉を上げる

「父さん、どうかしたのかい？」

「い、嫌！何でも無いよ・・・何でも無い」

そうは言うがその後父は終始暗いままであった  
どうして暗いのか聞いたが父は答える事は無かった  
只、「なんでも無い」とそれしか言わないのだ

その後なのは達は学校に向かい土郎と桃子は仕事に向かった  
因みになのはの家では「翠屋」と言う喫茶店を営んでいるのだ  
因みに結構人気がある  
余談である

\*\*\*

なのはは今自分の通っている学校の屋上でお弁当を開いていた  
その視線の先には自分の生まれた町である「海鳴市」と広い海原、  
そしてその端にある巨大な顔を模した岩「神面岩」と呼ばれる岩が  
ある

何故そう呼ばれているかは分からない

昔からそう呼ばれていたのだ

古い話だとあの中には黄金に輝く巨人が眠っていると言う話だが殆  
ど迷信だと思っている

何故ならなのはが生まれて9年の間一度もあの岩から巨人が現れた  
試しなど無いのだから

「ねえねえ、なのはは将来どうするの？」

隣に居たなのはの友人の「アリサ・バニングス」が聞いた  
それを聞いてなのは「え？」と素っ頓狂な声を上げる

「またあの岩を見てたの？」

アリサとは反対側に座っていた少女「月村すずか」が聞いた  
それになのはは頷く

「本当にあなたは毎度此処に來ると何時もあの岩を見るわよねえ。  
えっと・・・あれ何て言っただけ？」

「神面岩だよアリサちゃん」

「そうそう、それ！」

すずかに言われて思い出すかのように笑みを浮かべる  
そしてまた視線をなほに移す

「で、何時もあの岩を見てるの？」

「うん、何でもだろう？」

「あ、あんたねえ・・・」

流石にそんな返答が來るとは思っておらずアリサは呆れた顔になつた  
隣に居たすずかは苦笑いを浮かべている  
事実なのは岩を見ていたのは今に始まつた事では無い  
此処で食事をするようになってから毎度そうなのだ

「ねえねえ、アリサちゃんやすずかちゃんはある岩の中に巨人が眠  
つてゐると思つてる？」

「はあ？あんたあんな迷信信じてるの？」

「流石にそれは無いと思うよ」

なのはの言葉にアリサは軽く小馬鹿にするような感じで言い、すず  
かもまた笑いながらそう言う

「大体そんな話は大抵特撮とか作り話じゃないの？あの岩だつてき

つと誰かが掘ったんでしょ」

「そ、それは難しいと思うけど」

「じゃあ何？あんたはあの岩がガバアツて開いて中から巨人が現れるとでも思ってるの？」

「そ・・・それは・・・え」と・・・」

なのはが顔を軽く染めて指を目の前で合わせる

それを見てアリサがなのはの額を軽く小突く

「オバカ！そんな夢話見てる暇があつたら将来の事考えなさいよ！」

「でもアリサちゃん、その話なら歴史の授業でも習ったよ」

「知ってるわよ！30年位前に此処で妖魔帝国つてのとライディーンつて言う巨人が戦つたつて言う話でしょ！今時そんな話あると思う？大方作り話よ！教科書に載せる事態どうかと思うわよ私は」

全く信じていないアリサは自身満々にそう言った

そう、確かになのは達の学校では歴史の授業でその話が行われているのだ

今から30年前、此処海鳴市では遙か地底から「妖魔帝国」と名乗る巨大な勢力が突如現れて暴れまわつたと言うのだ

だがそれをあの神面岩で眠っていた巨人「ライディーン」が倒し平和が戻ってきたと言う話である

しかし最近ではその話も眉唾物とされている

特に10代〜20代の若者はその話など全く信じていない  
幾ら歴史の授業で取り上げられたとしてもスケールが大き過ぎるのだ  
信じると言う方が無理がある

（でも、それじゃあの夢って一体なんだろう？）

なのはは此処最近夢に見る事を思い出す

ならば何故毎晩同じ夢を見るのだろうか  
どうせならもつと楽しい夢を見たいのだが  
そうは思っても見る夢は毎晩同じなのだ

「ほらほら、早くご飯食べちゃいましょ！でないで昼休み終わっちゃ  
うわよ」

「あ、そうだ！」

其処でふと思い出す

弁当箱を見ると殆ど食べていない

急いで食べないと昼休みが終わってしまう

そう思った三人はそれから一言も喋らずに食事をした

\*\*\*

それから時刻は夕方

学校を終えたなのは達はいつも通りの道を通り塾へと向かっていた  
特に何も変わりはない何気無い会話を交わしながら塾へと向かっ  
ている

なのはも昼に話していた事などすっかり忘れて楽しく会話をしていた  
するとであった

(助けて・・・誰か助けて)

「え？」

ふと、何処からか助けを求める声が聞こえた  
声からして少年のようであった

「どうしたの？なのは」

「ねえ、今何か声聞こえなかった？」

「声？私は何も聞こえなかったけど？」

「あんた寝ぼけてるの？」

どうやらアリサとすずかの二人には聞こえなかったようである  
空耳だったのだろうか？

なのは自身もそう思いそのまま道を進もうとした  
だが、

（お願い・・・誰か・・・）

まただ！

誰かが助けを呼んでいる

しかし何故自分にだけ聞こえるのだろうか？

それは分からなかったがとにかく助けを求めているのだからこのま  
ま放って置く訳にはいかない

そう思ったなのは急ぎその声のした方へ向かった

「あ、なのは！何処行くのよ！」

「そっちは塾とは反対方向だよ！」

アリサとすずかは呼び止めるものはそれを聞かず駆け出す  
それに何かあったのだろうかと思つた二人は後を追つた

「一体どうしたのよ？」

「声が・・・声がしたの？」

「声？」

「うん、誰かが助けて！って言ってたの」

「はあ？私達には聞こえなかったけど？」

「でも確かに聞こえたんだよ！」

どうやらなのはにだけ聞こえるようだ

そう言うと多少疑問は残るもとりあえず嘘は言ってる顔には見えなかったたので二人も一緒にその声の主を探す事にした  
するとどうだろうか

道端には一匹の小動物が倒れていた

種類からしてフェレットである

あちこち傷だらけで息も絶え絶えである

なのは達はそれを見て驚くやら困惑するわパニック寸前になる  
しかしとりあえずはこのフェレットを獣医に連れて行く事が先決である  
うと言う決断になりフェレットを近くの獣医に連れて行く事にした

\*\*\*

時は経ち、今は夜

なのはは自宅に帰宅して家族と食事を取りながら先のフェレットの話をしていた

内容はフェレットを家で飼って良いかと言う内容である

あの後なのは達は塾でフェレットをどうするかと言う話になったのだが、アリサの家では犬が、すずかの家では猫が居る為小動物であるフェレットを飼おうとすれば惨劇が起こる危険性があつたので駄目であつた

其処で白羽の矢が立ったのはなのはであつた

幸いなのはの家には何も動物を飼つてはいない為家族の了承があれば可能なのだ

だが、知つての通りなのはの家は喫茶店を営んでいる

只でさえ衛生上五月蠅いのだ

果たして両親はうんと頷いてくれるだろうか？

不安で胸が一杯になりながらもなのはは家族にその話を打ち明けた

「あら？良いわねえ」

「うん、俺も特に否定する理由は無いぞ」

だが、帰ってきた答えは思っていたよりもあつさりであつた

とりあえずはOK、それで貰い手が見つかるまでは家で預かると言う形になつた

それを聞いていた郷也も美由紀も承諾してくれた

特に美由紀に至つては早くフェレットが来ないかと楽しみにしていたとりあえずは家族の了承が貰えたのでなのははホッとする

それからなのはがフェレットを受け取つたのはその翌日であつた

\*\*\*

『目覚めよ』

「誰だ、私を呼ぶのは？」

『目覚めよ……プリンス・シャーキン』

「私は……私は一体どうなったのだ？」

『お前はライディーンと戦い、そして敗れたのだ』

「そうだ、私はライディーンと戦い……そして倒されたのだ！では何故私は」

『シャーキンよ、再び我等妖魔帝国の為に働いて貰うぞ』

「では、私は再びライディーンと戦えるのか？」

『無論だ！お前には今度こそあの憎きライディーンを倒してもらおう』

「クククク、願ってもない！待っているライディーン！……待っている……高町士郎！」

そう呟き仮面を付けた男「プリンス・シャーキン」は再びこの地に蘇った

かつての宿敵を倒す為に

そう、妖魔帝国を滅ぼした勇者ライディーン

そしてその操縦者「高町士郎」を

\*\*\*

士郎は桃子と共に寝室で寝ていた

なのはとフェレットの話をして食事を終えてもう寝に入っていたのだが、士郎は未だ胸に引っかかる思いがあった

「まだ朝の事を考えてるの？」

「ああ、もしかしたらまた奴等が蘇るのかも知れない・・・ってね」

「そうね・・・でも、もう貴方が倒した筈でしょ？」

「そうだ、多くの犠牲を生んでしまったけど・・・」

士郎は遠い目でそう呟いていた

それを見て桃子は察した

士郎にとってあの時の戦いは忘れられる物ではなかった

多くの犠牲を生んだ末の平和

それが今打ち砕かれようとしていたのだから

「だが・・・俺はもうあれには乗れない・・・乗る事が出来ないんだ」

「ええ、知ってるわ」

「だが、そうなる誰が奴等を倒すんだ！奴等を倒す為に・・・母さんは命を掛けたというのに・・・俺は何も出来ないのか？」

「・・・もう寝ましよう、少し疲れてるのよ」

「・・・ゴメン」

そう言つて士郎と桃子は寝る事にした  
だが、士郎の予想通り、彼らは・・・妖魔帝国は少しづつその牙を  
伸ばしてきていたのだ

\*\*\*

翌朝、今日は学校が休みなのでなのははすぐに獣医の元を訪れた  
昨日預けたフェレットを受け取る為である

「あのお、昨日預けたフェレットさんはどうですか？」

「ええ、まだ包帯は取れないけどかなり元気になったわよ」

獣医の先生がそう言つてフェレットを差し出す  
それを見てなのははパツと笑顔になる

最初に見た時はどうなるかと思つていたがどうやら大事には至らな  
かつたようである

なのはは獣医からフェレットを受け取ると急ぎ足で家へと向かつた  
早く家族に見せたいからだ

本当ならアリサとすずかも来る予定であつたのだが急な予定が入つ  
てしまい結局なのはは一人で来る事になつたのだ

自然となのはの足が軽やかになる

やはりフェレットが無事だったからだろう

今なのはの手元には籠に入れられたフェレットが大人しくしている

そして、帰り道の途中、またなのはは海原に佇む神面岩を見た  
やはり何時もあの岩が気になってしまう  
だが何故なのかと聞かれると首を傾げてしまうのだが

「ちよつと、寄り道していくかな」

1人呟いてなのはは何時もの道とは違った道を行った  
その先には巨大な神面岩があつた

\*\*\*

その神面岩のある遙か上空を巨大な戦艦が飛行していた  
その外見は人の手を連想していたが構造は岩のようであつた  
そしてゴホンの指の先には怪物のような顔が付けられていた  
妖魔帝国の戦艦「ガンテ」である  
そしてその中にある椅子に座つてシャーキンが懐かしむかのように  
眼下に映る神面岩を眺めていた

「懐かしい、月日は経つても未だに憎たらしげに佇むのだな神面岩  
よ・・・今その面を叩き壊してくれよう」

そう言つとシャーキンは立ち上がる  
そして手を伸ばして声高らかに指示を出す

「直ちにドローメを出撃させよ！目障りな神面岩を破壊してこの町  
一体を瓦礫の山に変えてしまえ！」

シャーキンの命を受けてガンテの顔の部分から大勢のクラゲ状の怪  
物「ドローメ」が現れる

そのドローメの軍団は真っ直ぐに真下にある神面岩を目指した

\*\*\*

なのははふと訪れた神面岩の前で座り込んでいた  
その手には籠に入れたフェレットが居る

「本当に凄いよねえ、一体誰がこんな岩作つたんだろう？」

岩を見ながらなのはは呟いていた

するとフェレットは籠の中から神面岩を見ていた・・・そして

「これが神面岩・・・」

「うん、そうだよ・・・って、ええええええええええええ！フェレットが  
喋ったあああああああ！！！」

なのはは驚いた

そりゃ驚くだろう

何故なら今まで喋る筈の無かったフェレットが突然喋ったのだから

「ええ！ふえ、フェレットが喋った？一体どうして？」

「あの中に・・・勇者が、ライディーンが眠っている！」

「あ、あのお・・・貴方は一体？」

何が何だか分からなかった

何故このフェレットは喋るのか？

そして何故このフェレットが神面岩を、そしてライディーンを知っているのだろうか

「ねえ、何で君は喋れるの？そして何で君はライディーンを知ってるの？」

「お願いです！今すぐライディーンを目覚めさせて下さい！」

「ええ！ライディーンって本当に居たの？あれって作り話でも迷信でも無いの？」

「この世界の貴方なら知ってる筈です！30年前に妖魔帝国を滅ぼした勇者ライディーンを！」

「そ、そうなの？で、でも無理だよ！私だって見た事無いんだもん！それにどうやって蘇らせるのか分からないよ」

なのはも困った顔になる

それはいきなりそんな事を言われては困るのも無理は無い

「時間が無いんです！もうすぐ奴等が・・・妖魔帝国がやってきます！」

「妖魔帝国？」

「30年前に地上を制服しようとした地底帝国です！それがまた蘇えろつとしているんです！だから早く勇者を目覚めさせないと！」

「言ってる事が良く分からないよ・・・それにどうやって目覚めさせるの？」

なのはがフェレットに聞く  
するとなのはの頭の中に声が響く

『目覚めよ勇者、悪魔の時代が再び訪れようとしている』  
「え？だ、誰？」

『目覚めよ勇者、ライディーンを呼び覚ませ』  
「やっぱり！ライディーンは居たんだけ！」

初めて実感した

ライディーンは実在したのだ

だが、今は喜んでいる場合では無い

すると目の前にあった神面岩が突如真つ二つに割れた

すると、その中から何と黄金に輝く巨人が立っていたのだ

「あ……あれが……」  
『そう、ライディーンだ』

謎の声はそう告げる  
そして続ける

『唱えるネンシンキリキ』  
「ね……ネンシンキリキ」  
『コウシヨコンライ』  
「コウシヨコンライ」

声に導かれるがままになのはは呟く

『フェード』  
「フェード」

『フェード』

「フェード」

『ライディーン』

「ラアアアアアアイディイイイイイン!!」

声に導かれるがままになのはは叫ぶ

すると黄金の巨人の体から黄金色が抜け色鮮やかになり腕と顔の装甲が開く

そしてそのままゆっくりと巨人がなのは元へ歩み寄る

「え？こ、こつちに来る」

『恐れるな勇者よ、ライディーンと一体になるのだ。叫べ、フェードインと』

「え、また叫ぶの？」

『叫べ！悪魔がやってくる』

「悪魔が？」

「来た！」

フェレットは空を見上げる

其処には巨大な腕の姿をした怪物と無数のクラゲ状の怪物が居た

「え？ええ！何あれ？」

『勇者よ、あれが敵だ』

「あれが・・・敵？」

「そう、あれが・・・妖魔帝国・・・僕達の敵だ」

フェレットがそう言う

するとクラゲ状の怪物「ドローム」の大群は一斉にライディーンに攻撃を開始する

『勇者よ、叫べ！フェードインと』

「さ、叫ばなきゃ駄目なの？」

『叫べ！でなければ汝の故郷が瓦礫の山となるぞ』

「！！！！！！！！」

なのははふと自分の住む町を見た

もしこのままであれば、きっとこの軍団は町に攻め入る筈だ

そうなれば町は破壊されてしまう

そんな事を許せる筈が無い

意を決したなのはが立ち上がる

そして叫ぶ

「フェエエエエド・イン！」

なのはは声高く叫んだ

するとなのはの体は浮かび上がりライダーの額に吸い込まれる  
ように入り込む

そして額を通り越してライダーの中に入っていく

その中を落ちていくとその先にはライダーの操縦席があった

「此処って、ライダーの中？」

(そうだよ)

「わ！あれ？フェレット君？何処？」

(えっと・・・言い辛いんだけど・・・今僕はライダーと同化  
しちゃったみたいなんだ)

「ええええええええええええええええええええええええ！」

驚きっぱなしである

「そ、それじゃどうなるの？」

(ああ、大丈夫だよ。別にずっとこのままって訳じゃないし。それにこれなら君をサポート出来るしね)

「そ、そうなんだ」

とりあえず納得する

すると目の前のモニターには無数のドローメがライダーンを取り囲んでいた

「と、とりあえずどうしよう?」

(今は戦うしかない、今このライダーンは君の思い通りに動くよ)

「え? ホント?」

試しに自身の腕を動かして見た

するとそれと同じようにライダーンの腕が動いたのだ

なのはの動きに合わせてライダーンは動く

それこそまるでライダーンが自分自身になったかのようなのである

だが、感動している暇は無い

そうしている間にもドローメは火炎弾を口から放ってきた

放たれた火炎弾はライダーンに直撃する

だが、爆発はしたもののライダーンには傷一つついていない

「ふえええ、いきなり戦えって言ったってどうすれば良いのお?」

(落ち着いて、ライダーンの右腕にあるゴッドブレイカーを使つて)

「って、どうやって使うの?」

(武器の名前を叫んで、そうすれば使う事が出来る)

また叫ぶのか

内心うんざりしながらもなのはは言われた通りにする

「ゴオオオッドブレイカーアアアア」

するとライダーの右腕に装着されたゴッドブロックから長い剣が現れる

それを使い目の前に居た数体のドローメを切り裂いていく

(良いよ、その調子！)

「う、うん！」

まだ慣れないなのはフェレットのサポートもあつてか迫り来るドローメを次々と切り裂いていく

その光景はガンテに乗っているシャーキンにも見えていた

「一体どうしたと言うのだ？ライダーが蘇つたと思つたら戦い方はまるで素人では無いか？まあ良い、ライダーが出てきたと言う事は乗っているのは士郎である事に変わりはない！ならばドローメ全軍で叩きのめせ」

シャーキンが命じ、ドローメが一斉にライダーに襲い掛かるそれを必死にブレイカーで切り裂くも数が多すぎて間に合わないそして遂にはブレイカーを装備していた右腕と左腕がドローメの腕に絡まり動かなくなってしまった

そのライダーの前に数体のドローメが近づく

「ど、どうしようフェレット君！」

(大丈夫！ゴッドミサイルを使って！)

「うん、ゴオオオッドミサイィィィル！」

なのはがそう叫ぶとライダーの腹部から鳥の姿をしたゴッドミサイルが飛び出す

それは目の前に居たドローメを軽々と吹き飛ばす

「いい加減離して！ゴツドブロック、スピィィィン」

絡みついたドローメを解く為に装備していたブレイカーを回転させて絡み付いていたドローメの腕を引き千切る

そして左腕に絡み着いていたドローメを引き寄せてブレイカーで叩き切った

「フン、やはりドローメでは勝てんか、ならば」

そう呟くとガンテはゆっくりとライダーの前に降り立った

「お、大きい・・・」

(雰囲気には飲まれないで！大丈夫、ライダーなら負けないよ)  
思わず飲み込まれそうになったのはをフェレットが励ますように言う

「久しぶりだなライダーン、私の事は勿論覚えていよう」

「え？あのお・・・どちら様ですか？」

「な、女の声？貴様何者だ！」

「え！わ、私は高町なのはです」

「何！どういう事だ？名前が違う・・・一体どういう事だ！」

シャーキンは何が何だか分からず奥歯を噛んだ顔をする

かつてライダーンに乗っていたシャーキンの宿敵ではなく、今ライダーンを動かしているのは全くの別人なのだ

「まさか・・・私が眠っていた間に奴に・・・土郎の身に何かあつ

たのか？」

シャーキンの中に一抹の不安が過ぎる  
もしそうならこれ程の苦痛はない

かつての宿敵と再び合間見える好機だと言つのにその宿敵ともう会えないのであればこれほど辛い事は無いのだから  
その時であつた

『退くのだ、シャーキンよ』

「その声は！」

『今はまだお前は完全では無い、それに化石獣が無ければ勝負にもなるまい・・・今は退いて体制を立て直すのだ』

「し、しかし・・・」

『ワシの命令が聞けんのか？プリンス・シャーキンよ』

「・・・分かりました、バラオよ」

苦渋の顔で了解したシャーキンはゆっくりとその場を後にする  
その光景をなのはとフェレットとライディーンは眺めていた

「勝った・・・のかなあ？」

(とりあえずは・・・かな)

「はふう・・・何だか凄く疲れちゃったよお」

戦闘を終えたなのはにドツと疲労感が襲つてきた  
無理も無い

今まで戦闘とは無縁の生活を送つてきた少女にいきなりの実戦がや  
つてきたのだからだ

ライディーンはゆっくりと自身が出てきた神面岩に降り立つ

すると元の金色の体色に戻りその額からなのはとフェレットを吐き  
出す

吐き出された二人はゆっくりと大地に降り立つ

「あ、出れた」

「そうみたい」

降りたつたなのは振り返る

するとライディーンが元の位置に戻りゆっくりと神面岩が閉じてしまった

なのは今複雑な心境であった

これから自分はこの怪物と戦わなければならないのだろうか

そう思うと不安になってくる

果たして自分に出来るだろうか

「大丈夫、君になら出来るよ」

「あ、有難う」

不安になるのはフェレットが励ます

「あ、ところで君名前なんていうの？何時までもフェレット君じゃ変だし」

「僕の名前はユーノ。ユーノ・スクライアって言うんだ」

「そうなんだ。私はなのは。高町なのはって言うの」

「宜しくね、なのは」

「こっちこそ宜しくね。ユーノ君」

なのはとユーノは互いに自己紹介を交わす

そしてそれが、二人と妖魔帝国との長い戦いの始まりでもあったのだ

## 次回予告

遂に蘇った妖魔帝国

そしてライディーンの元に化石獣が迫る

しかしなのははまだ操縦に慣れておらず苦戦を強いられる

果たしてなのはとライディーンは悪魔を退け平和を守る事が出来るのか？

次回、魔法勇者ライディーン『魔を貫く神の矢』

次回もこの小説にフエエエエド・イン！

蘇る勇者（後書き）

次回は化石獣が登場します

魔を貫く神の矢（前書き）

初の化石獣出現

## 魔を貫く神の矢

「一体どういう事なのだ！何故ライディーンに士郎は乗っていないのだ！」

戦いから戻ってきたシャーキンは荒れに荒れていた

それは先の戦いで宿敵ライディーンと再び出会えた喜びも束の間、何と乗っていたのは宿敵高町士郎ではなく、同じ性を名乗るなのとは言つ少女であつたのだ

その為シャーキンは荒れていたのだ

『落ち着くのだシャーキンよ。お前が眠っている間に地上では30年の月日が流れたのだ』

「な！30年だと？」

『悪魔であるお前にとっては微々たる時かも知れないがその間に奴は人と契りを交わし子を授かった。それが先の戦いで出会ったのはと言つ小娘なのだ』

「何と！ではあなのはと言つ小娘は士郎の娘なのか！」

シャーキンは驚愕した

しかしそれなら何故士郎は娘を遭えて危険な戦いに身を置かせるような真似をするのだろうか

シャーキンの知っているかつての士郎ならそんな事は断じてしなかつた筈だ

それが何故……

『悩んでも仕方の無い事だシャーキンよ。それよりお前の目的は変わっておらん。お前はこれより化石獣を使い今度こそライディーン

を倒すのだ！ベロスタンよ』

「は！」

石像の姿であるバラオが名を呼ぶと物陰から背の低い老人が現れた

「ベロスタン！お前も蘇ったのか？」

「このベロスタン、プリンス・シャーキンの行く所例え地獄の一丁目であるうとお供いたします」

「流石だな、では早速頼む」

「心得ております」

ベロスタンは一礼すると祭壇に向かい祈りを捧げる

すると目の前に突如無数の岩が集まり人に似た形を成していく

そしてベロスタンは叫ぶ

「い〜〜の〜〜ち〜〜さ〜〜ず〜〜け〜〜よ〜〜」

と叫ぶ

すると岩に無数の怨念が集まりやがて一体の怪物になった

紫の体に片腕が鋭い刀にもう片方は鋭利なハサミになった怪物である

怪物は雄たけびを上げて両腕を頭上で合わせる

「化石獣バストドンに御座います」

「うむ、早速出撃だ！憎きライディーンを倒し、地上を我等妖魔帝国の物とするのだ！」

シャーキンが叫ぶ

それに呼応するかのようにバストドンもまた雄たけびを上げるのであった

## 第2話 魔を貫く神の矢

「なのは!」

「無事だったか?なのは」

家に辿り着くと父と母が半ば血の気の引いた顔で出迎えた  
余程心配したのだろう

それに対しなのはは笑顔を浮かべてこう言った

「うん、大丈夫!大きな巨人さんが助けてくれたの?」

遭えて自分がライダーの操縦者だと言うのは伏せておいた  
余り家族に心配を掛けたくないからだ  
もしそれを知ればきっと家族はそれを許さないだろう  
まだ9歳の少女にその運命は重過ぎるのだ

「ねえお父さん、あの大きな巨人さんってライダーなんだよね」

「え?あ、ああ・・・そうだな」

「うわあ、やっぱりライダーンって居たんだ!」

「ええ、最後にライダーンを見たのは私達が中学生の頃ね」

家の中に入ったなのはは両親にライダーンについて聞いた  
ライダーンはやはり過去にも一度現れておりその際に地上に進攻

してきた妖魔帝国を退けた事があるのだ

「ねえねえ、それじゃその時誰がライディーンに乗ってたの？」

「さ、さあ・・・お父さんも其処までは分からないんだよ」

「ごめんなさいね。私もなの」

「そうなんだ」

それを聞いてなのは少し残念そうな顔をした

もし誰か分かれればその人に色々聞きたかったのだが

しかし今はその問題は置いておく事にしよう

それよりも今はだ

「あ、そうだ！昨日預けたフェレット貰って来たよ」

と言つてなのはは籠に収まっていたユーノを机の上に置く

それを見た途端母桃子の目が物凄く輝いたのを父士郎は見ていた

「きゃあああああ！可愛い！いいいいいいいいいいいい！！」

大声で叫び主室にフェレットを掴んで頬擦りしだす母

それに多少困った顔をするユーノをなのはは苦笑いを浮かべて見ていた

此処ではユーノはあくまで只のフェレットと言う事にしてある

でないとなのはがライディーンの操縦者だとばれてしまうからだ

それから間も無くして兄と姉も帰ってきて皆してユーノを弄んでいたのは余談であつて

家族に揉みくちやにされた後、ユーノはなのはに連れられてなのはの自室に居た

「ううう、大変な目に会ったよ」

「ゴメンねユーノくん、皆悪い人じゃないんだけどね」

「ああ、気にしなくて良いよ」

暗い顔をしたなのはにユーノは必死に良い寄る

「でも、大変な事になっちゃったなあ・・・まさか私があのライダーの操縦者になっちゃうなんて」

「そうだね、でも僕が言うのも難だけどきつとなのはなら出来るよ」

「有難うね、ユーノ君」

励ますユーノになのはは笑顔になる

「そうだ！ねえユーノ君。ライダーンってもっと他に武器とか無いの？」

「あるけど今はまだ使えない武器が多いよ」

「ふえ？どうして？」

「それはまだ君がライダーンに認められてないからだよ」

「え？まだ駄目なの？」

「うん、ライダーンと同化した時に聞いたんだけど、まだなのは

に自分の武器を全て使わせる訳にはいかないって言ってたんだ」

「でも、どうして？」

「ライディーンの武器の中には操縦者を傷つける物もあるんだ。今なのはがそれを使えば最悪君の命に関わる事になるんだ」

恐ろしい事を言うなあ

口には出さなくても心の中ではそう思っていた

しかしそれは前にライディーンに乗っていた人も同じであった筈である

きっと前に乗っていた人もそんな思いで戦っていたのだろう

「とにかく、今は早くライディーンに認められるように頑張らないと駄目だね」

「そうだね」

ユーノの言葉になのはも頷く

\*\*\*

「ねえなのは！今日のニュース見た？」

翌日学校に来たアリサがいきなりなのはを見てこう言った

「え？何が？」

「何って、昨日出たのよ！あんたの言ってたライダーンが出てきたのよ！」

「うん、私も見たよ」

アリスに続いてすずかも話に加わった

どうやら二人は実際にライダーンを見たのでは無く翌朝のニュースでライダーンの存在を知ったようである

「にしても本当に居たのねえ、ライダーンって」

「うん、凄かったよねえ・・・あんな大きなクラゲを全部やっつけちゃうんだから」

どうやら何時の間にかライダーンはニュース沙汰になってしまったようだ

其処でなのは一抹の不安を感じた

もしかしたら自分がそのニュースに映っていたのかも？

「ね、ねえ・・・そのライダーンって一体誰が乗ってたの？」

「それが分からないのよ！その肝心な所だけ映って無かったのよ」

「うん、ニュースで出てきたのはライダーンが戦っている所だけだったんだよ」

アリスとすずかは非常に残念そうに言う

それを聞いてなのはホツとする

どうやら操縦者が自分だとばれていないようだ

「そ、そうなんだ。実はねえ・・・私目の前でライダーンを見た事があるんだよ」

「ええ！だ、大丈夫だったの？」

「うん、危なかったけど、あのライダーンが助けてくれたんだよ」

「良かったねえ、なのはちゃん」

その話を聞いてアリサとすずかは安心した顔になった

(う、嘘はついてない！只ちょっとだけ話の辻褄を合わせたただけだから)

内心心苦しさを感じながらもとりあえず自分が操縦者でない事を証明させる為の証言をしておいた  
まああそこに居たのは事実であつてで

\*\*\*

学校を終えたなのはは家路に向かっていた

(なのは、聞こえる?)

「え?ユーノ君!何処?」

(今僕は君の心に語りかけてるんだ)

「そ、そんな事が出来るの?」

なのはは驚く

(君はライディーンの操縦者に選ばれたから今の僕にはこんな事も出来るんだ)

「そうなんだ」

(因みになのはも同じように話せるよ。心で念じてみて)

(ええと・・・こんな感じ?)

(そう)

道を歩きながらなのはユーノと話していた

(ねえ、どうして私がライダーの操縦者に選ばれたの?)

(良くは分からないけど恐らくライダー自身が君を選んだんだよ)

(ら、ライダーが)

はた迷惑な話だ

そう思えた

(とにかく、また一度神面岩に向かおうよ、きっとまた何か分かるかも知れないし)

(うん、そうだね)

なのはは頷いて急ぎ足で家へ急いで帰る

\*\*\*

その頃、再びガンテは海鳴市を目指していた  
その上には新たに生まれた化石獣バストドンが立っていた

「今の私にはライディーンの操縦者などどうでも良い事だ！それよりも何としてもライディーンを倒す！それが私の使命なのだ！」

自身にそう言い聞かせるようにシャーキンはそう言った  
そしてシャーキンはガンテの上に居るバストドンに命じる

「行けい！バストドンよ！お前の力でライディーンを倒すのだ！」

シャーキンの命を受けてバストドンは声高らかに叫びガンテから勢い良く飛び降りた  
そして、その先には、ライディーンの眠っている神面岩があった

\*\*\*

丁度その頃、なのはとユーノはライディーンの眠っている神面岩に辿り着いていた

「ところでライディーンって何処で作られたの？」

「僕も詳しくは知らないけど、恐らく旧時代に作られたんだと思う

よ

「旧時代って……どれ位昔なの？」

「多分……1万年位……いや、もっと昔だと思う」

「そ、そんなにいい！」

「驚くのも無理は無いよ。僕だって信じられないんだから」

言ったユーノ自身も信じられないといった顔をしていた

現代の科学技術ですらあれだけの大型ロボットを作るのは無理なのだ  
ましてや1万年前の世界にあれだけの巨大ロボットを作れるとは思  
えなかったのだ

「でも一体何処でライディーンは作られたの？」

「ライディーンを作ったのは古代ムー帝国なんだ」

「え？ムー帝国って確か海に沈んだんじゃないの？」

「そうなんだ、だから僕もどうしてムー帝国がライディーンを作っ  
たのか分からないんだけど……は！」

ふと、ユーノは空を見上げた

上空ではガンテと無数のドローメが降り立っていた

「ふええええ！また来たの？」

「行こう！なのは。今妖魔帝国と戦えるのはライディーンだけなん  
だ」

「うん！……えっと……まず何だっけ？」

「え？……まさか……呪文忘れたの？」

ユーノが青ざめる

「だ……だつてあんな長い文章覚えられないよお！」

「ええええええええええええ！」

驚きの声を上げるユーノ

そりゃ当然だろう

そう思っている、また最初の時のようにライディーンがなのはの頭の中に語りかけて来た

『勇者よ、呼ぶのだ・・・ライディーンを』

「え？また聞こえた！・・・でも、呪文は・・・」

『叫ぶのだ・・・ライディーンと』

「えと・・・ええと・・・ラアアアアイディイイイイイ  
ン！！！」

言われた通りに叫ぶ

すると神面岩が一人でに開き中から金色に輝く待機状態のライディーンが姿を現した

「え？で、出てきた！」

「そんな、起動の呪文も無しにライディーンを目覚めさせるなんて  
！」

「とにかく、行こう！ユーノ君」

「う、うん」

なのはの言葉を聞いてハツとなる

そして二人に向かってライディーンが赤い閃光を放つ

それはライディーンの額から放たれた閃光であった

それを浴びてなのはは叫ぶ

「ライディイイイイン、フェエエエエド・イン！！！」

そう叫びながらなのははライディーンの額に吸い込まれて行く

そしてなのははライダーンのコクピットに  
ユーノはライダーンと同化したのだ

「行くよ、ユーノ君、ライダーン」

(任せて、なのは)

『ラアアアアアアイ』

なのはの言葉にユーノとライダーンは答える

そして前を見据える

するとガンテの上に何かが乗っているのに気づく

「あれ？ユーノ君、ガンテの上に何か乗ってるよ？」

(あれって、まさか化石獣)

「化石獣？」

(気をつけてなのは！今までのドローメの様にはいかないよ)

「うん、分かった！一気に決めるよ！ゴオオオオッドブレイカアア

アアア

『ラアアアアアアイ』

なのはの声に反応してライダーンの腕からゴッドブレイカーが伸びる

そして一気に飛び上がりガンテの上に居る化石獣バストドンに向かっていく

それを迎え撃つかのように化石獣バストドンもまたガンテから跳び上がって手に取り付けられていた剣を振り上げて向かってくる

ライダーンのゴッドブレイカーとバストドンの剣が空中で激しくぶつかり合う

金属音を奏で、激しい火花が舞い散る

「くう……」

だが、なのはの顔は重苦しい顔であった  
それもその筈である

なのは自身には剣の扱いなど殆ど無いのだ  
そしてライダーはなのはが動かしている  
多少はライダーが補佐しているとは言え剣の経験が無いのは  
がバストドンに挑むには辛いところがあった

(なのは、大丈夫?)

「た、多分・・・でも、凄い強いよこの化石獣!」

(相手は剣を主体にしてる化石獣だから接近戦に強いんだ!このま  
まだとなのはには分が悪いよ)

「う、うん・・・でもゴッドミサイルじゃ倒せそうに無いし・・・  
どうすれば」

そう思っていた

そんな時に悪い事は起こる物であり

乾いた金属音を奏でてライダーのゴッドブレイカーが根元から  
折れてしまったのだ

今のライダーは丸腰の状態である

そんなライダーに向かってバストドンが剣を振り上げる

「ああ!ど、どうしよう!」

目を見開いた

そんな時、なのはの脳裏にふと昔からの光景が映った

それはなのが父士郎と兄郷也の特訓を見ていた時であった

「はあっ！」

「おー！」

一瞬の隙を突き郷也が士郎の持っていた剣を弾き飛ばす

そして一気に勝負を掛けようと上段から一気に振り下ろす

しかし、士郎はそれを自身の頭上に当たる寸前に両手で郷也の剣を挟みこむように掴んでしまったのだ

「くうっ！」

「フッ、まだ甘いな郷也」

そう言って持っていた剣ごと郷也を放り投げる

「凄い、お父さん今の何て言っの？」

「今のは「真剣白羽取り」って言っのさ」

「白羽取り？」

「まあ、なのはにはまだ出来ないかな」

そう言って士郎はなのはの頭を撫でながら笑っていた

「出来るかどうか分からないけど・・・ええーい！」

最早駄目元であった

だが、それが幸いしたのかバストドンの剣を見事ライディーンの両腕で挟み込んだのだ

そしてそのまま剣ごとバストドンを放り投げた

(凄い、一体今の何?)

「えつとね・・・今のは真剣白羽取りって言うんだよ」

ユーノに聞かれてなのはは自信を持ってそう言った

だが、状況は相変わらず悪いままである

ブレイカーは折れてしまい白羽取りは言ってしまうえば一回きりなのだ  
何か他に武器は無い物か?

そう思っていた時、なのはの脳裏にまたあの時の声が響いた

『勇者よ、神の矢を使え』

「え!」

『叫ぶのだ、ゴッドゴーガンと』

(なのは、今は言われた通りに)

「うん、ゴオオオオオオッド、ゴオオオオオオガン!!」

なのはが叫ぶとライディーンの腕に巨大な弓が出来上がる

そして背中から一本の矢を取り出し弓に番つがえる

するとコクピット内にターゲットスコープが現れる

それはバストドンの弱点とも言える核の位置を示していた

「あそこを狙えば良いの?」

(そうみたい)

「よし!」

なのはは弓を構える動作をして狙いをつける

そして番えた矢を思い切り放つ

放たれた矢は狙い通りバストドンの弱点である核の位置

左胸に深く突き刺さる

するとバストドンは断末魔の悲鳴を上げて爆発した

「まさか、これほどまでに上達が早いとはな・・・少し悔っていたか！」

苦虫を噛んだ顔をしたシャーキンはそのままガンを引き上げさせるそれを見送ったなのははまたシートに深く腰を降ろす

「な、何とか勝てたよあ・・・」

(け、結構危なかったね)

どうやらユーノ自身もヒヤヒヤしたらしく声が震えていた戦いには勝てたがなには不安が募っていた

(今のまま戦ってて大丈夫なのかなあ・・・もっと私が強くならないとその内ライディーンは負けちゃうのかも?)

なのはの脳裏にそんな不安が過ぎっていた

## 次回予告

新しく現れた化石獣にライディーンは大苦戦を強いられる  
ブレイカーもゴーガンも封じられたライディーン  
しかしその時ライディーンの中に眠っていた新たな力が目覚める

次回、魔法勇者ライディーン『羽ばたけ、ゴッドバード』

次回もこの小説にフエエエエエエエド、イン！！

羽ばたけ、ゴッドバード(前書き)

更新遅れて申し訳ない

久々の更新です

## 羽ばたけ、ゴッドバード

一面不気味な空間であった

暗き地底のような空間の中にそれは佇んでいた

「妖魔帝王バラオ」

それを模した石像が其処にはあった

そしてその前には妖魔帝国攻撃指令であるプリンスシャーキンが膝を折り肩で息をしていた

前回ライディーンと戦い敗れ逃げ帰ってきたシャーキンはバラオの手により手痛い仕置きを受けた直後であったのだ

「おお、おいたわしやプリンスシャーキン。これも全てはあの憎きライディーンのせいに御座います」

「言うなベロスタン・・・全てはライディーンの操縦者が士郎では無いと知ったばかりに油断した余の浅はかさが生んだ結果だ」

嘆くベロスタンにシャーキンは言った

そしてすぐさま立ち上がる

「ベロスタンよ！次なる化石獣の準備は出来たのか？」

「その件ですが、これをご覧下さいプリンスシャーキン」

ベロスタンはそう言って手を伸ばす

其処には合計二十一個の蒼く輝く宝石が収められていた

見た目だけ見ればとても美しい宝石ではあったがとてもそれだけとは思えない輝きを見せていた

そう、何処か不気味な輝きをしていたのだ

「ベロスタンよ、これは一体何なのだ？」

「はい、これこそ我等妖魔帝国が遙か昔に作り上げたその名も「ジュエルシード」と呼ばれる物で御座います。この中には数多くの怨念が込められております。これを化石獣に組み込む事により更に強力な化石獣を作る事が出来るのです」

「何と、それは凄い！」

ベロスタンの言葉にシャーキンは驚いた

そしてシャーキンの前でベロスタンは一つのジュエルシードを中央の台座に納め祈りを捧げる

邪悪な祈りであった

するとジュエルシードを中心にして回りに残骸が集まっていく  
そしてベロスタンの邪悪な祈りはいよいよ最終段階に入った

「命授けよ」

ベロスタンの叫びを受けて目の前にあった岩石の塊はやがて一体の

巨大な化石獣となった

化石獣が誕生の産声を上げる

それはとても荒々しい叫びであった

「これぞ新たな化石獣グランゲに御座います」

その姿は海底に浮ぶクラゲのようであった

巨大な丸い頭に多数の長い触手を持った不気味な怪物であった

「ふむ・・・ベロスタンよ、本当にこれは今までの化石獣よりも強いのか？とてもそうには見えんぞ？」

「ご安心をプリンスシャーキン。この化石獣グランゲにはライディーンにとっては強敵となりますぞよ」

そう言つてベロスタンは合図を送る

するとグランゲの目の前には一体のロボットが現れた

その姿はライディーンを模したロボットであった

勿論それはライディーンのリプリカに過ぎなかった

「ご覧下さいプリンスシャーキン。これがグランゲの力に御座います」

二人の目の前でグランゲはライディーンのリプリカに触手を伸ばし  
雁字搦めにした

すると全身を震わせてグランゲの体から高圧電流が流れ出した

その電力はゆうに十万ボルトはいつている

それを浴びたライディーンの装甲に徐々にヒビが入りだした

「ライディーンの操縦者はかつての高町士郎とは違いまだ子供で御座います。子供であればこれだけの電撃を浴びてまず意識を保てる筈が御座いません。そしてトドメにこれで御座います」

すると今度はグランゲが巻きついてきた箇所が徐々に石化してしまつたのだ

「何と！これは一体？」

「グランゲは触れた物を全て石に変えてしまつ力を持っております。

例えばライディーンと言えどもその力の前では無力に御座います」

「うむ、では早速出撃だ！」

シャーキンが手を上げて指示を出す

すると化石獣グランゲをガンテに乗せ早速出撃した

此処は高町家の道場

その中でなのはは兄恭也と共に剣術の指南を受けていた

「さあ、打ち込んで来い、なのは！」

「うん！」

互いに竹刀を持った二人が道場の中で互いにしないを合わせていた  
そしてなのはは竹刀を構えて恭也に打ち込んだ  
が、それを恭也は軽く返す

しかしそれでもめげずになのはは打ち込んでいく  
その様子を道場の端で姉の美由紀とフェレットのユーノが見守っていた

何故なのはが兄恭也と稽古をしているのかと言うと、全ては前回の  
戦いの後であった

前回、バストドン相手にどうにか勝てたなのはであったが、それは  
同時にこれから先更に強力な化石獣との戦いを予見させるには充分  
であったのだ

其処で、今のままでは、今のライダーの力に頼ってる状態では  
恐らく何時か負けれると思ったなのはは思い切って兄恭也に稽古を頼  
み込んだのであった

結果は恭也は快く承諾してくれ、今に至るのだ

（なのは・・・頑張っ！今は応援するしか出来ないけど、きつと

君なら強くなれるよ)

フェレット姿のユーノがなのはを応援するような眼差しを送った  
本当なら声を出したいのだが生憎今のユーノはフェレットである  
下手に声を出すとなのはがライディーンの操縦者だと思われるしま  
うので控えているのだ

そんなユーノの前ではなのはが肩で息をしていた

「今日はこの位にしておこう。いきなり無理に詰め込んで強くなる  
ならないさ」

「う・・・うん・・・」

恭也の言葉になのはは頷く

そして互いに竹刀を納めて礼をし今回の練習は終了した

\*\*\*

「あうううう・・・疲れたあ」

練習を終えたなのはは自分のベットの上で横になっていた  
かれこれ恭也との稽古は既に一週間は続いていた

毎日朝、昼、夕と時間に余裕のある時に恭也と共に稽古をしている  
恭也が居ない場合は一人で稽古をしている

少しでもライディーンを強くするには自分自身が強くならなければ

ならないのだ

しかしなのは元々それほど体力がある訳ではなかった  
その為一朝一夕で強くなれる訳ではなくこうして毎日練習をしてい  
たのであった

「お疲れなのは。でも良く続くねえ」

「勿論だよ！だって私が頑張らないと世界が大変な事になっちゃう  
もん」

「なのは・・・御免、僕がライダーを操ればこんな苦勞をか  
けなくても良かったんだけど」

「良いよ気にしないで。全部私がやろうと決めた事だもん！」

謝るユーノになのはが笑顔で答える

それを見てユーノも自然と笑顔になる

「そう言えば明日はすずかちゃんの家に行く予定なんだよねえ」

「えっと・・・それは僕も一緒に行くの？」

「勿論だよ！何時化石獣が来ても良いようにしないとね」

「アハハ・・・マジメだねえなのはは」

なのはの言葉にユーノは笑みを浮かべる

するとなのはは大きな欠伸をした

「でも今日は眠いからもう寝るね・・・おやすみ、ユーノくん」

そう言ってなのははベッドで眠りに入った

「おやすみ、なのは」

ユーノもまた用意された籠の中で蹲って寝る事にした

\*\*\*

翌日、なのははユーノを連れて月村家に遊びに来ていた

因みにそれには兄恭也も一緒である

何故兄恭也が一緒なのかと言うと恭也の目当てはすずかの姉の月村忍に会うからである

実は恭也と忍の二人はとても仲が良く忍ぶも良く翠屋の手伝いに来てくれるのである

二人共とてもお似合いのカップルでもあった

まあそれは良いとして、今回はなのは、アリサ、すずかの三人で互いに楽しい会話をしていた

因みにユーノはと言うと、月村家の猫達の遊び道具と化していた  
それを見てなのはは苦笑いを浮かべていた

が、とりあえず気にしないでおいた

まあユーノなら大丈夫だろう。そう思っていた

「そう言えばこの間もライディーンが出たわよね」

「うん、この間は凄いピンチだったみたいだよ」

「へ、へえ・・・そうなんだ」

顔には出さないが物凄く動揺してるなのは

何しろそのライダーの操縦者はなのだから

しかしそれがバレると何かと大変な目に遭うので黙って置く事にした

「でもこの間もあんたライダーの近くに居たわよねえ？」

『ギクッ』

アリサの言葉になのはは背筋の凍る思いがした

そう、この間も偶然なのはが神面岩に居た際にガンテが迫って来たのだから

そしてその際らいディーンに搭乗して戦ったのだ

もしかしたら誰かに自分がライダーに乗っていた所を見られていたかも知れない

「た、偶々だよ！また何時ものように神面岩を見に行ったら巻き込まれちゃって・・・あの時ライダーが出てこなかったら危なかったよお」

「ふうん、まさかあんたがライダーの操縦者だったりして？」

『ギクギクウ！』

なのはの顔一杯に冷や汗が流れ出す

視線が泳ぎ明らかに動揺していた

が、

「まさかねえ？あんたあたしより理数系は得意だけど基本的にトロイシ」

「あ、アリサちゃん酷い！」

「アハハ・・・そ、そうだよ、私がライダーの操縦者な訳ないじゃない！第一怖いし」

「そつよねえ」

なのはの言葉を聞いてアリサも改めてそう思えた  
それを聞いてなのはもホツとする  
すると突如なのはの頭の中に声が響いた

『なのは、聞こえる？』

『え？ユーノ君？』

『大変だよ、またガンテがやってきた、すぐに行こう！』  
『う、うん！分かった』

ユーノとの念話を終えてなのはは立ち上がった

「どうしたの？なのは」

「ええと、ユーノ君が心配だからちよつと見てくるね」

「あ、それなら私達も一緒に行こうか？」

「だ、大丈夫だよ！それにユーノ君結構臆病だから他の人が近づくと逃げちゃうかも知れないし」

なのはが適当な言い訳を述べて急ぎユーノの元へ向かった  
それは月村家より少し離れた森の中であった

「ユーノ君」

「なのは、すぐにライディーンを呼ぼう！」

「呼ぶって・・・此処から神面岩まで結構距離あるよ？一体どうやって呼ぶの？」

「なのは、これを」

そう言つてユーノはなのはに赤い球状の宝石を渡した

「これは？」

「これがあれば何処でもライディーンを呼ぶ事が出来るんだ。これ



上空には海鳴を目指して突き進むガンテの姿があった  
そしてその回りを多数のドローメ、そして化石獣グランゲが飛行し  
ていた

勿論の事その周囲には防衛軍の戦闘機の残骸が散っていた

「フン、奴等の兵器などこの程度な物よ、やはりライディーンが相  
手の方が心が躍るな」

ガンテに乗り込んでいたシャーキンが呟いた  
そう呟いているとその前をライディーンが現れた

「ふっ、噂をすれば現れたなライディーン」

シャーキンはほくそえんでいた

「ライディーンよ、今日が貴様の命日となるのだ！」

シャーキンが微笑みながら言った

そして化石獣グランゲと多数のドローメを向かわせた

「す・・・凄い数だよユーノ君！」

（気をつけてなのは！あの化石獣以前の敵とは違ってかなり強くな  
ってる気がする）

「うん・・・でもあんなクラゲみたいなのが本当に強いのかなあ？」  
（油断大敵だよなのは！）

ユーノが付け加える

だが、だからと言って尻込みしていたら勝てる戦いも勝てないと言  
う物

早速ライディーンの腕に装備されたゴッドブレイカーを起動させる

腕に装備された盾の先から長い剣が延びる

「行くよお！ゴオオオオッドブレイカアアアアア！」

雄たけびを上げてブレイカーを振るう

するとグランゲは自慢の触手をブレイカーの腕に絡みつかせる

「ふ、振りほどけない！」

（なのは、ゴーガンを使って！）

「う、うん！」

ユーノに言われた通りライディーンのゴーガンを起動させようとしたしかしそのゴーガンの装備された腕にもグランゲの触手が絡み付いてきた

ライディーンの両腕にグランゲの触手が絡みつき身動きが取れなくなっていた

そしてその直後、グランゲの体から電撃が放たれる

その電撃はグランゲを通してライディーンに、そしてなのはとユーノに伝わってきた

「きゃあああああああああ！」

（わあああああああああ！）

二人が悲痛の叫びを上げる

幼いなのはにグランゲの放つ電撃はかなりの痛みであった

かろうじて意識を保っては居るもののまともに操縦出来る状態ではなかった

そしてその後更に恐ろしい事が起こった

「ら・・・ライディーンの・・・腕が・・・」

そう、ライディーンの両腕が突如石化してしまったのだ  
まるで両腕の感覚がなくなってしまった  
最早今のライディーンには武器が無い  
更にはなのは自身もグランゲの電撃を浴びてしまっていた為とも  
に操縦出来ない状態であった

「ハツハツハ、勝負あったなライディーン！それグランゲよ！そのままライディーンを地面に叩き付けてしまえい！」

シャーキンが命じる

その命に従うようにグランゲは思い切りライディーンを地面に向かって放り投げた

既にライディーンは肩まで石化が進んでおり今の状態で地面に激突したら確実にライディーンは粉々になってしまう

(な・・・なのは！しっかりして！なのは！)

ユーノが叫ぶ

しかしなのはは未だ意識が朦朧としている状態であった  
間も無く地面へ届くと言った時であった

(勇者よ・・・今こそ神の鳥となるのだ。叫べ、ゴッドバード)

また脳裏に聞き覚えのある声が響く

朦朧としたなのはは言われるがままに叫んだ

「う・・・ゴッドバアアアアアド、チエエエエエエンジ！」

なのはは叫んだ

するとライディーンは突如その人型であったライディーンが鳥の姿となった

そして地面スレスレに飛行した

「こ……これって！」

(凄い……ライディーンの新しい武器が覚醒したんだ)

突如変形したライディーンになのはとユーノが驚いた

そしてそのまま旋回して高速で飛行する

その面前には多数のドロームが立ちふさがっていたがそれを問答無用で蹴散らしていく

そしてそのままグランゲに進路を向けた

「で、でもこのままじゃまたあの触手に捕まって石化されちゃうんじゃない？」

(なのは、今のライディーンなら敵の弱点が分かる筈、それを叩けばあの化石獣を倒せる筈だよ)

「そ、そっか！……よおし」

ゴッドバードは両目を輝かせて化石獣を見つめる

すると目の前の化石獣の内部構造が丸見えの状態になった

ゴッドバードの能力の一つ「エスパーアイ」である

すると、グランゲの頭部の中心に青く輝く宝石状の物体が映し出された

「あれが弱点なんだね、よおし……いつけええええええ！」

なのはは思い切りアクセルを踏み込む

それに呼応してゴッドバードは勢いよくグランゲに突っ込んでいった  
グランゲがそのゴッドバードに触手を伸ばすもそれを引き千切りそ

のままグランゲを突き破った  
その際に中心にあった青い寶石はバラバラに砕け散ってしまった  
それから数秒間を置いた後グランゲは爆発してしまい元の岩石へと  
戻ってしまった

そしてそれから元の人型に戻ったライダーが咆哮する

『ラアアアアアアアイ』

その光景を見たシャーキンが悔しそうにしていた

「おのれ・・・だが、今のライダーは両腕が使えん！今の内に  
叩いてしまえい！」

シャーキンが命じガンテが迫り来る

シャーキンの言った通りライダーの両腕はまだ石化が直ってお  
らず動かない状態であった

（なのは、此処は一旦引き上げよう！今のままじゃ勝ち目が無いよ  
！）

「大丈夫だよユーノ君！ライダーのもう一つの武器を使うから」  
（もう一つの武器？・・・まさかそれって！・・・駄目だ！それを  
使ったらなのはだって只じゃ済まない）

ユーノは察知した

恐らくライダーに封印されているもう一つの武器を使う気なのだ  
だがそれはまだ今ののでは使いきれぬ物では無いのは知っていた  
それを使おうと言うのだ  
しかしユーノの制止を振り切りなのはは技を使う

「念動光線・・・ゴオオオオオオオッド、アルフアアアアアアア

「アアアア」

『ラアアアアアアアアアアアアアアアア』

突如ライディーンが不思議な色に包まれそのまま発光をガントにぶつける

凄まじい衝撃がガントに襲い掛かった

「こ……この技は……まさか其処までライディーンを使いこなせているとは……此処は体制を立て直すしかないか……」

悔しそうな顔を一層強めながらシャーキンは引き上げた

しかしシャーキンは此処でも誤算をした

もしあのままライディーンに攻撃を加えていればきつとライディーンを倒せた筈であつたからだ

何故なら今のライディーンの中では

「う……ううう……」

(なのは……すっかりして！なのは)

その中ではなのはが真っ青な顔をしてグッタリしてる

先のゴッドアルファの影響が響いていたのだ

今なのはにはゴッドアルファの使用は身体に大きな負担を掛けてしまうのだ

仕方なくライディーンは地面に降り立ちゆっくりとなのはを地面に降ろす

すると元の黄金色の石像に戻りそのまま虚空の彼方へ消え去ってしまった

「なのは……大丈夫？」

「う……うん……何とかね……」

ユーノの声に目を覚ましたなのはがゆっくりと立ち上がる  
しかし、その時なのはは見てしまった  
その目の前に居た人物を

「お・・・お父さん」

「なのは・・・まさかお前が・・・」

それは偶然其処を通りかかった父士郎であった

そう、士郎は知ってしまったのだ

ライディーンを動かしているのが娘のなのはだと言つ事を

\*\*\*

時を同じくして、其処からそう遠く離れて居ない木の上に一人の少女と一匹の狼が居た

「あゝあ、危なっかしいなあ。あれじゃ見てることちがハラハラしちゃうよ」

「そうだね」

オレンジ色の体毛を持つ狼の言葉に金髪のツインテールの髪型をして、黒いマントを羽織った少女が答えた

「あれならフェイトがライディーンに乗った方がよっぽど上手く戦えるよね」

「うん、やっぱり・・・あの子じゃライディーンの力を充分に発揮出来てない・・・あれじゃ何時か妖魔帝国にライディーンが負ける」

「そりゃやばいよ、何とかしないと」

「うん・・・そうだね」

少女は頷いた

どうやら少女はライディーンの事を知っているようだ

一体彼女は何者なのだろうか？

そして彼女の目的は

それは今は誰も知らない事でもあった

## 次回予告

遂にライディーンの操縦者がなのはだと言う事が父士郎にばれてしまった

丁度その頃、新たな化石獣が現れる

しかし其処へなのはとは違う別の少女がライディーンを呼んだ  
一体彼女は？

次回、魔法勇者ライディーン『敵か味方か？もう一人の操縦者？』

次回もこの小説にフェエエエエエド、イン！！

羽ばたけ、ゴッドバード（後書き）

遂に登場

これからどんな風に絡むかは作者もまだ計画してません

敵か味方か？もう一人の操縦者？

時刻は夜、場所はお馴染みと言える海鳴市にある神面岩であった  
人の顔を模した岩でありその中には化石獣を倒したライディーンが  
眠っている

「ライディーン・・・お前は何であの子を選んだの？」

その岩に問いかけるかのように一人の少女が近くの岩に腰掛けていた  
金髪の長い髪を両端に束ねたツインテールの髪をしており服装も何  
処か大人びていた  
その少女は少し落ち込んだように神面岩を見ていた

「何故ムー帝国とは関係ないあの子を操者に選んだの？あの子は一  
体何者なの？」

少女「フェイト・テストロツサ」の脳裏にはライディーンの操者高  
町なのはの姿が浮んで離れないでいた

\*\*\*

場所は変わり、此処は高町家のリビング  
その中になのはと父士郎が居た

恭也と美由紀と桃子は居ない  
席を外してもらっているのだ  
その中で二人は重い表情を浮かべていた

「なのは、教えてくれ・・・お前が今ライダーに乗っているのか？」

沈黙を破ったのは士郎であった

それになのはは静かに頷く

それを見て士郎は目を強く閉じて落胆した

相当ショックだったのだろう

それを見てなのはは何度も頭を下げて謝った

だが、そんななのはの頭を士郎は優しく撫でた

「すまない、なのは・・・俺がライダーに乗れなくなったばかりにお前にこんな辛い思いをさせてしまった」

「お父さん・・・」

士郎はなのはの事を案じていたのだ  
ライダーに乗ると言う事はそれだけ危険に見舞われるという事なのだ

それをあるうことが自分の娘にそんな辛い運命を背負わせてしまった事に責任を感じているのだろう

「お父さん・・・もしかして、30年前にライダーに乗って戦っていたのって・・・もしかして」

「そうだ・・・お父さんだよ」

衝撃の発言であった

まさか自分の父がかつて此処海鳴を襲った妖魔帝国を撃退したライ

ディーンのパイロットだったとは  
そして、士郎がかつての戦いを語るうとした時であった  
激しい振動が響き渡った

「何？」

「まさか、また化石獣が・・・」

士郎となのはは立ち上がった  
まさか此処まで進行が早いなんて思いもしなかったのだ

「お父さん、私行ってくるね」

「なのは！よすんだ！」

ライディーンに向かおうとするなのはを士郎が止める

「お父さん」

「なのは、ライディーンは危険だ。乗ってはいけない！」

「お父さん・・・私は乗らなきゃ駄目なの！でないと、アリサちゃんやずかちゃん・・・うっん、もつと大勢の人達が悲しい思いをするんだよ」

「し、しかし・・・」

「それに、お父さんは今ライディーンに乗れないんでしょう？だったら私が乗らないといけないんだよ」

なのはが士郎を見る

その目は決意の籠った目であった

その目を見た士郎は黙ってしまった

そして、ゆっくりと手を離す

「分かった・・・だが、これだけは約束してくれ・・・絶対にライ

デイーンの「禁じられた力」を使っては駄目だよ」  
「禁じられた力・・・うん、分かった」

なのはは頷いて一人駆け出す  
その姿を土郎は見送る事しか出来なかったのである

\*\*\*

その頃、海鳴市街では上空をガンテが飛行し、無数のドローメと一体の化石獣が町を破壊していた

「やれい、化石獣「バルガス」よ！お前のその力で町を破壊しライ  
デイーンを倒すのだ」

シャーキンが叫ぶ

その下では堅牢な鎧に身を包んだ屈強な化石獣が居た  
頭部には二本の長い角を持ちその腕はとても太い  
自衛隊の攻撃を食らってもビクともしない  
そしてその強靱な腕でビルを根物から持ち上げて投げつける  
凄まじい怪力の持ち主だった

「す、凄い怪力だよユーノ君」

「多分今回の化石獣はパワー重視で来たんだと思う、おまけに装甲  
もかなり厚い・・・多分ゴッドゴーガンやゴッドバードでもキツイ

「かもしれない」  
「そんなあ！」

目の前が真っ暗になる思いであった  
ライダーの決め技が使えない  
つまり勝てないと言うのだ  
だが、諦めてはいけない  
自分が戦わなければならないのだ  
そう決意したなのは赤い宝石を天に掲げる

「来て！ライダーン」

なのはが叫ぶ  
すると赤い宝石は形を変えて黄金の巨人となる  
すると巨人の額から赤い閃光が放たれてなのはとユーノを導く

「ライディイイイイン！フェエエド・イン！」

なのはが叫びライダーンと同化する  
すると黄金色だった機体が徐々に青を基調とした色になり顔と腕が  
現れる

『ラアアアアイディイイイイイン！！！！』

両腕を頭上で交差してライダーンが叫ぶ

「現れたなライダーン！」

シャーキンが見る

そして化石獣バルガスがライダーンの前に立つ

(なのは、気をつけて！)  
「分かってるよユーノ君」

なのはが頷く

まずは小手調べとばかりに腹からゴツドミサイルを数発放つ  
鳥形のミサイルが弧を描いてバルガスに当たる  
だが、爆煙が晴れると其処には無傷のバルガスが居た

「やっぱり駄目みたい・・・なら！」

今度はゴツドブレイカーを振り上げる

バルガス目掛けてブレイカーの一閃が放たれる

だが、そのブレイカーをバルガスは片腕で止めてしまったのだ

「そ、そんな！」

(ライディーンのパワーを上回ってる！)

圧倒的パワーでライディーンを上回っているバルガス

そのまま腕を掴んでライディーンを後方に投げ飛ばしてしまう

「きゃあああああ！」

(うわああああ！)

二人が声を上げる

ライディーンが地面に転がる

だがすぐに起き上がる

「接近戦じゃ勝てない・・・だったら遠距離で！」

ゴーガンの矢を番えて放つ

青白い閃光を纏うゴーガンが飛ぶ

しかしその矢すらバルガスの装甲を破る事は出来なかった  
強靱な胸部装甲の前にゴーガンの矢が折れてしまったのだ

「ゴーガンも駄目なの？だったら・・・」

ライダーンが上空に舞い上がり鳥形に変形する

「ゴツドバアアアド・チエエエエンジンジ！！！」

鳥形に変形したライダーンがバルガスに向かっていく  
しかし、それが当たる寸前にゴツドバードをバルガスが両腕で止めてしまったのだ

「と、止められた！」

「馬鹿め！バルガスのパワーを侮ったなライダーン！」

そのままバルガスがゴツドバードを投げ飛ばす  
そしてトドメに二本の角から怪光線を放つ  
それを諸に浴びたライダーンが苦しむ

「くあああああああああああ！」

（なのは！・・・うあああああああ！）

なのはとユーノの悲痛の叫びが響く

そしてそのままライダーンが近くの森林に落下してしまった

「バルガスよ！まだライダーンは潜んでいるかも知れん！見つけ出してその首をバラオに捧げるのだ」

シャーキンの命令を受けてバルガスが咆哮する

\*\*\*

そんな時、なのはとユーノはライディーンから放り出されていた  
ライディーンの機体は元の黄金色に戻っていた  
そして地面の上では傷だらけのなのはが横たわっていた

「う……あ……」

朦朧とする意識の中、必死に立とうとするなのは  
すると、そんななのはの前に一人の少女が居た  
金髪の長い髪を両端で束ねた髪型をしている  
そしてその少女がなのはを見ていた

「あ……き……君は？……」

「フェイト……フェイト・テストロッサ……貴方じゃライディ  
ーンは扱えない……良く見てて」

フェイトがそう言うとライディーンに近づくと  
すると今度は金色の閃光がフェイトを包む

「ライディーン、フェード・イン！」

フェイトがそう言うと彼女をライダーが取り込む  
そして同じように顔と腕が現れ、黄金色がはげていく  
だが、現れた色は違っていた  
かつての青の色ではなく黒いライダーであった

『ラアアアアイディイイイイイイン!!!』

黒いライダーンが咆哮して腕を振り上げる

「ら・・・ライダーンが・・・」

自分以外の者がライダーンを扱えた事になのはは驚いた  
そんななのはの前で黒いライダーンが飛び立つ  
それを見た後、なのはは気を失ってしまった

\*\*\*

「何だ？あれは・・・」

シャーキンの前には黒いライダーンが居た  
明らかに雰囲気が違うのだ  
そして黒いライダーンがバルガスの前に降り立つ

「ええい！バルガスよ！さっさと叩き潰せ」

シャーキンの命令を受けてバルガスが腕を振り上げて襲い掛かる

「ライダーン、行くよ」

『ラアアアアアアアアイ！！！！』

「エネルギーカッタアアア！」

フェイトが叫ぶ

するとブレイカーをエネルギーの粒子が包み込む

光の剣である

それをバルガス目掛けて切りつけた

切断音が響いた

バルガスの右腕が宙を舞ったのだ

バルガスが腕を抑える

其処へすかさずライダーンの頭部の角が光り輝く

「ゴツドプレツシャアアア！」

両腕を胸の前で交差させ頭部から閃光を放つ

その閃光が放たれる

その閃光を浴びたバルガスが苦しむ

装甲が徐々にヒビ割れていく

「何だ！さっきまでとは強さが違うぞ！」

「シャーキン……私はお前達を許さない！」

「な、その声……貴様……アリシアか？」

「私はフェイト……アリシアはもうこの世には居ない！」

「何だと？」

フェイトとシャーキンは互いに言葉を交わす  
そしてシャーキンからバルガスに狙いを変える

「ゴツドバード！」

そして再びゴツドバードに変形したライダーがバルガスに命中する

ボロボロの装甲の状態でゴツドバードを食らったバルガスはそのまま粉々に砕け散ってしまった

「まさか・・・まさかバルガスが敗れようとは」

「シャーキン、戻ってバラオに伝えなさい、私が居る限りは絶対妖魔帝国の思い通りにさせたいと」

「・・・覚えておこう・・・引き上げだ！」

シャーキンはそう言い残して悠々と引き上げていく  
その姿を黒いライダーが見ていた

\*\*\*

目を覚ましたのはの前には黒いライダーが降り立ってきた  
そして、そのライダーから先の少女、フェイトが降りてきた

「凄い・・・あの化石獣を倒すなんて・・・」

「貴方はライディーンを使いこなせていない。今のまま戦っていたら貴方は何時か命を落とす」

「え？」

「悪い事は言わない・・・今後ライディーンには乗らない方が良い・・・これからは、私がライディーンで戦うから・・・安心して良い」

そう言うとフェイトはなのはの前から姿を消すように去っていく  
その姿をなのはは只黙って見るしか出来なかった

「私じゃ・・・ライディーンを扱え切れないの？」

煮え切らない思いがなのはの中にあつた

そして、彼女は、フェイトはなのはにとって敵なのか？それとも味方なのか？

それは今は誰にも分からないのであつた

## 次回予告

フェイトが操るライディーンは圧倒的強さで次々と化石獣を打ち破つていく

だが、化石獣を上回る巨烈獣の前に彼女のライディーンも苦戦を強いられる

なのはよ、今こそ再びライディーンと共に戦うのだ！

次回『蘇れ！不屈の闘志と共に』

次回もこの小説にフェエエエエド・イン！

蘇れ！不屈の闘志と共に（前書き）

大変お待たせしました  
早速どうぞ

## 蘇れ！不屈の闘志と共に

海鳴市の近くの海岸では歪な黒煙が上がっている。

何か巨大な物が爆発した様な感じに起こった黒煙である。

そして、その黒煙を上空から見下ろす者が居た。

ライディーンである。

しかし、今までのライディーンとは少し違っていた。

それは色である。

今までのライディーンは空の様に青い色であった。

だが、今目の前に居るライディーンは夜空の様に黒いのだ。

漆黒のライディーンである。

「これで・・・16体目」

漆黒のライディーンに搭乗していた少女がそう呟いた。

金色のツインテールの髪型をした綺麗な顔立ちの少女である。

『順調だねえ、フェイト』

「うん、21個のジュエルシードの内、あの娘が壊したのも含めて16個」

『残りは・・・5個！これなら楽勝だね』

「そうだね」

同じ様にライディーンと融合した女性と親しげにそう話す。

そのままの足取りで神面岩に戻る。

岩の前にライディーンを降ろし、元の金色の待機状態に戻し、ライディーンの中からフェイトと先ほど会話をしていた女性が出てきた。

「はあ、仕事した後はお腹が空くねえ・・・帰ってご飯食べたいよ」

「あはは、相変わらずだね、アルフは」

余程空腹なのか腹を摩る女性アルフにフェイトは笑いながらそう言っていた。

\*\*\*

なのはがライダーンに乗らなくなつてから実に1週間が過ぎていた。

その間、勿論シャーキン、そして化石獣の猛攻はあった。

だが、その度にフェイトの乗るライダーンにより撃退されていたのだ。

その為になのはがライダーンに乗る必要は、もうなくなっていたのであった。

今ではなのはは普通の小学生として生活を送っている。

父士郎もそれを聞いてとりあえず一安心していた。

これ以上なのはが危険な目にあわずに済むからだ。

だが、当のなのはは余り乗り気ではなかった。

「・・・これで、良かったのかなあ？」

ふと、なのはは何時もの屋上から神面岩を眺めながらそう呟いていた。

本当にこれでよかったのだろうか。

全てをあのフェイトと言う少女に任せて本当に良かったのだろうか。その自問自答の念がなのはの中で渦巻いていた。

【なのは……】

「あ、ユーノ君」

ふと、普段からなのはが携帯している赤い球体からユーノの声が響いた。

その声色からはなのはを気遣うように取れた。

【なのは、最近あんまり元気ないけど……気にしすぎちゃ駄目だよ】

「有難うね、ユーノ君、私だったら全然大丈夫だよ」

口では元気一杯に答える。

だが、それとは裏腹になのはの顔は晴れやかではなかった。

そして、再び視線を神面岩に戻す。

煮え切らない思いが、なのはの中で未だに渦巻くのを自身で分かっていた。

だが、それをどう取り除けば良いのか、それが今の彼女には分からないで居たのだ。

\*\*\*

此処、妖魔帝国では、今日もライディーンに敗北したシャーキンが帝王バラオに罰を受けていた。

今回の罰は今まで以上に厳しく、その罰を一身に受けたシャーキンはその場で意識を失ってしまったのだ。

部下達の手により手当てを受け今は安静な状態で寝室で眠っている。そんなシャーキンを側近であるベロスタンは痛々しく見ていた。

「おお、何とおいたわしやプリンスシャーキン。全てはあの忌まわしきライディーンさえ倒せば・・・こうなれば手段は選んでられん。かくなる上はこのワシ自らが出陣し、ライディーン首をもぎ取るしかない・・・勝手な振る舞いお許し下さい、プリンスシャーキン」

一人、眠りについているシャーキンに深く頭を下げるとベロスタンは部屋を後にした。

そして、祈りの間に立つと、残ったジュエルシード全てを集める。

「残りのジュエルシードは5つ、こうなれば5つ全てをあわせて化石獣を超える存在。そう、『巨烈獣』を作る他ない！それで今度こそライディーンの息の根を止めるのじゃ！」

ベロスタンは意を決したかの様に頷き残ったジュエルシードを纏め合わせる。

するとそれから生まれ出たのは今まで以上に巨大で強力そうな怪物であった。

「いゝの〜ち〜さ〜ず〜け〜よ〜」

ベロスタンが唱える。

すると化け物に命が吹き込まれ、やがて一体の巨烈獣が誕生した。

巨烈獣が誕生の雄たけびを上げて部屋を吹き飛ばさん勢いで暴れまわる。

「ほほほ、良いぞ良いぞ。このパワー・・・これなら確実にライディーンを倒せる。そうすればプリンスシャーキンがこれ以上罰を受ける事もない・・・待っている！ライディーン」

ベロスタンの瞳がこれまで以上に黒く燃え上がっていた。

\*\*\*

高級マンションを思わせる一室。

其処にフェイトとアルフは居た。

アルフはソファアに座りドッグフードを平らげている。

その前でフェイトは一枚の写真を見ていた。

其処には幼い自分、そしてそんな自分の肩を持つように微笑んでいる紫色の長い髪をした女性ともう一人、緑色の美しい髪をした女性が映っていた。

「また、昔の事思い出してたの？」

「うん、またあの時みたいなおかしい日々に戻りたいな・・・って思ってたね」

アルフの前でフェイトはニッコリと微笑んだ。

だが、アルフには分かった。  
その笑顔が何処か寂しげであった事に。

「でもさ、レムリアさんはもう・・・」  
「・・・・・・・・」

アルフがふと呟くと、フェイトの顔が突如と暗くなった。  
それを見たアルフがしまったと後悔し慌てふためく。

「で、でもさあ！私達が頑張ればきつと何とかなるよ！後ジュエル  
シードも残り5つなんだしさあ・・・頑張ろうよ！ね？」  
「うん、そうだね」

無理やり元気づけようとしている感じが見え見えであったが、其処  
がまたフェイトにとっては嬉しい事でもあった。  
そんな時であった。

突如、机の上に置いてあった三角形の形をした金色の物体が発光し  
だす。

それを見たフェイトとアルフがハッとする。

「フェイト！これって・・・」  
「また、妖魔帝国の奴等が・・・行こう！アルフ」  
「全く、のんびりご飯も食べてられないよ」

愚痴りながらもフェイトとアルフはマンションの屋上へ向かう。  
其処でフェイトは先ほど発光した金色の物体を頭上に掲げる。

「来て、ライディーン」

フェイトの言葉に答えるかの如く金色の物体は発光し、それが上空

へ舞い上がると発光が更に大きくなり、やがて待機状態のライダーが其処に現れた。

「ライダーン、フェード・イン！」

待機状態のライダーンの中にフェイトとアルフが吸い込まれるように入っていく。

すると、黄金色のライダーンがやがて、漆黒の色となり肩と腕、そして顔が現れる。

『ラアアアアアイディイイイイイイン！！！！』

上空で合体を終えたライダーンが両腕を振り上げて咆哮する。

「行くよ、アルフ、ライダーン」

『うん、今回もちやちゃつと終わらせようよ』

『ラアアアアアアイ』

フェイトの言葉にアルフとライダーンが答える。

そして反応のあった海岸へと向かう。

其処には巨大なガンテと無数のドローメが海鳴の町へと向かおうとしていた。

「妖魔帝国！お前たちの好きにはさせない！ゴッドプレッシャー！」

無数のドローメ達に向かいゴッドプレッシャーを放つ。

それにより大半のドローメが叩き落される。

「ええい、さすがはライダーンじゃ！ドローメよ！全機で当たるのじゃ！此処で何としてもライダーンを倒すのじゃ！」

ガンテに乗っていたベロスタンの命を受けてドローメ達が一斉にライディーンに向かって行く。

「数で押すんじゃ、私とライディーンは倒せない！ゴーガンソード！」

ライディーンの左腕に装着されたゴーガンを広げ、それを武器として振るう。

近づくドローメは皆ゴーガンソードの餌食であった。

「ふむ、流石にドローメでは歯が立たぬか。ならば行けい！巨烈獣コーカツよ！」

ベロスタンが名を叫ぶ。

ガンテの発進口から一体の巨大な怪物が現れた。

「あ、あれは！」

『嘘！あれから5つのジュエルシードの反応が感じられるよ！』

「5つも！」

アルフの言葉にフェイトは驚く。

ジュエルシード一つが入っただけでも相当な強さになる。

それが5つも同時に一体の化石獣に内臓されているのだ。

その強さは計り知れない程であった。

嫌、最早その強さは化石獣では表しきれない程であったと思われる。

「アハハハ！それ、行けい！巨烈獣コーカツよ！貴様の力でライディーンを捻り潰してしまえい！」

ベロスタンの命じるままに巨烈獣コーカツは雄たけびをあげてライディーンに向かっていく。その外見は居様な物であった。足の無い馬、そしてその上には上半身だけの騎士がくっついていると言っ感じである。

両手には分厚い盾と槍を持ち、その堅牢さを伺わせる。明らかに強敵であった。

「負けない！私はお前達にだけは負けない！」

ブレイカーを振りかざしてライディーンはコーカツに向かっていく。だが、そのブレイカーの一撃をコーカツはシールドで防ぐ。金属同士がぶつかり合う音がし、火花が舞い散る。

それでもコーカツのシールドには傷一つついていない。にも関わらずブレイカーはヒビだらけになってしまった。

「か、硬い……」

思わずフェイトがそう呟いた。

其処へ間髪入れずにコーカツが槍を振るってライディーンに向けて突いてきた。

それをカウンターで返す為にとブレイカーで応戦する。

しかし、槍が勝ったのかブレイカーは根元から完全にへし折れてしまった。

『そんな！ブレイカーが！』

「この敵……今まで以上に強い！」

フェイトがそう呟いている時であった。

コーカツが槍をライディーンに向けて思い切りぶつけてきたのだ。

凄まじい衝撃が二人を襲う。

余りの衝撃の為に上空でライダーンが放心状態となってしまう。

「それ！今じゃコーカツ！貴様の最大の武器で止めをさせい！」

ベロスタンがそう命じる。

すると、コーカツの両脇に取り付けられていた巨大な円盤状の物体が一人でに動き出しそれぞれがライダーンの左右に陣取る。

その円盤状の物体の内側から何と、巨大な棘が生えてきたのだ。

その二つの円盤がライダーンに向けて迫ってきた。

「う・・・はっ！」

フエイトは今自分が置かれている状況を把握しハツとした。

だが、その時には既に遅すぎた。

漆黒のライダーンの体を挟み込むように、円盤状の物体が、そして其処に生えていた鋭利な棘がライダーンを串刺しにしたのだ。

「きゃあああああああああ！」

『くあああああああああ！』

フエイトとアルフが悲痛の叫びを上げる。

ライダーンの体は既に棘が深く突き刺さっておりとても痛々しい光景となっていた。

「アハハハ！それ、止めにダムダム砲を撃ち込め！ライダーンを木っ端微塵に粉碎してやるのじゃ！」

コーカツの馬にあたる部分に装填されていた巨大なドリル状のミサイル。

その名もダムダム砲が高速で回転して発射される。

その発射されたダムダム砲は真つ直ぐにライディーンの亀裂の中に入っ  
て行き、やがて大爆発を起こした。

ライディーンの体から凄まじい数の爆発が起こる。

全身に亀裂が走り左腕と右足が粉々に砕け散ってしまった。

「あつっ！ぐううう！」

『フェ、フェイトオ！』

悲痛の声を上げるフェイトにアルフが声を掛ける。

ライディーンにフェードインすると言ふ事はその精神と同一化する  
事になる。

即ちダメージがそのまま信号となって自身に帰ってくるのだ。

今フェイトはライディーンの受けたダメージをそのまま体全身で浴  
びている事となっている。

とても少女が耐えられるダメージではなかった。

「アヒヤヒヤヒヤ！これでライディーンもおしまいじゃ！それ、も  
う一発打ち込んでやれい！」

再びコーカツの額にダムダム砲が装填され高速で回転します。

「ま・・・負けられない・・・絶対に・・・ゴッドバード！」

今フェイトを突き動かしているのは最早気力のみであった。

気力を振り絞って操縦桿を握り締めてそう命じる。

ライディーンは直ちに上空に舞い上がりゴッドバードに変形する。  
だが、今のライディーンに元の速度はない。

それでコーカツを貫けるかと言えば無理な話であった。

「馬鹿め、相打ちなどさせんわ！」

ベロスタンがニヤリと微笑む。

その微笑は確実な物であった。

突っ込んできたゴツドバードをコーカツはシールドを使い弾き飛ばす。

「うあああああああああああああ！」

悲鳴をあげながらフェイトの乗った漆黒のライディーンは錐搦み状に地面に落下した。

「ヒヤヒヤヒヤ！勝った！勝ったぞい！見てくれましたか！プリンスシャーキンよお！！！」

ベロスタンが諸手を振り上げてシャーキンの名を叫ぶ。

その顔には驚喜の顔が其処にあった。

\*\*\*

「ああ！ライディーンが！！！」

その時、なのははライディーンの戦いを遠くから見ていた。

そして、あの時多くの化石獣を葬り去った筈のライディーンが今日

の前の巨烈獣に倒されてしまったのだ。  
そしてゴッドバードに変形するもシールドで跳ね返されて地上に落下してしまっただ。

「そっだ！あの子は？」

なのはは今ライダーを操縦しているであろう少女が気に掛かり  
急ぎライダーの下に向かった。  
其処にはボロボロで待機状態となったライダー、そしてその前で  
横たわる少女と女性が居た。

「フェ、フェイトちゃん！」

少女の下へ駆け寄りそつと抱き起こす。  
相当のダメージを受けたのか意識が朦朧としている。

「うう・・・ふえ、フェイトオ」

うなるように頭を抑えながら女性が起き上がる。  
すると、女性の視線にはフェイトを抱きかかえるのが居た。

「フェ、フェイトオ！」

「あの・・・多分大丈夫だと思います。気を失ってるだけみたいで  
すし」

「あなた・・・あの時の」

アルフがそう言おうとした時であった。  
突如辺りから爆発が起こる。

上空でドローメ達や巨烈獣が我が物顔で暴れているのだ。  
それを見てなのは立ち上がる。

「アルフさん、フェイトちゃんをお願いしますね」

「って、あんた何する気だい？」

「今度は、私がライディーンを動かします」

それを聞いたアルフの目がギョツと大きくなった。

「しょ、正気かい？相手はあのジュエルシールドを5つも平らげた化け物なんだよ！あんたじゃ勝てないよ！」

「そうだとっても、このままじゃ町が・・・私の故郷がなくなっちゃうんです。そんなの、私黙って見てるなんて出来ません」

アルフにそう言うとなのはは肩に乗っていたユーノを見る。

「行こう、ユーノ君」

「分かった。やろう！なのは」

ユーノもまた同じであった。

なのはが戦うのなら自分も戦う。

その心構えで居るつもりなのだ。

その二人がライディーンの前に立つ。

「ライディイイイイイン！フェエエエエド・イン！」

なのはが叫び、なのはとユーノはそれぞれライディーンに吸い込まれていく。

そしてライディーンの色合いが元の青色になっていく。

『ラアアアアアイディイイイイイン！……！』

上空に飛翔してライダーが叫ぶ。

その姿はとても痛々しくボロボロの状態であった。だが、それでもライダーは巨烈獣の前に立つ。

「ほほう、懲りずにまだやって来るかライダー。今度こそ息の根を止めてくれるわ!」

「負けない!町の皆のためにも。そして、あの子の為にも!」

『行こう!今度こそ勝つ為に』

気合十分なのはとユーノは言い合う。

だが、ライダーの損傷は思った以上である。

全身に棘の穴が開き亀裂が走り、その上左腕と右足が無いのだ。これではゴーガンは使えない。

「ふん、勢いやよし、じゃがそれだけでは勝てないと言う事を教えてやるわ!」

ボロボロのライダーに向かいコーカツが向かってくる。

ライダーに止めを刺そうと何度も槍を突いて来る。

それをどうにか必死でライダーはかわしていく。

「ゴーガンは使えない。ブレイカーも駄目、ミサイルじゃ効き目薄そう。だとしたら使えるのは、あれしかない!」

『なのは!まさかまたアレを?』

ユーノがハツとする。

だが、その時には既になのが発射体勢に入っていた。

「行くよ!念動光線、ゴオオオオツド・アルファアアアア!」

『ラアアアアアアアアアアアアイ!!!』

なのはの言葉と共にライダーが咆哮する。  
そして眩い閃光が放たれその閃光がそのままコーカツを包み込んだ。  
ライダーから放たれた閃光にコーカツは苦しそうに唸る。  
だが、それも一瞬であった。  
直ちにコーカツは両手を振るい閃光を跳ね飛ばした。

「あつ！」

跳ね飛ばされた衝撃でライダーは地面に落下する。  
ダメージのせいで思うように動けないのだ。

その上、ゴッドアルファはなのは自身にも多大なダメージを与えている。

そのせいかなのはも意識が朦朧としだしているのだ。

「ヒヤハハハハ！最早ライダーなど恐るるに足らず！それい！  
今度こそダムダム砲で粉みじんにしてしまえい！」

地面に落下したライダーに向かいコーカツがダムダム砲を放つ。

「ど、どうしよう・・・ゴッドアルファが効かないんじゃ・・・ど  
うすれば」

『なのは、聞こえる？』

「コーノ君！」

『なのは、ゴッドバードだ！僕も一緒に戦つ』

「え？何かあるの？」

『なのは、ゴッドバードになった時にこう叫んでくれ。』ヘッドカ  
ッター』って』

「ヘッドカッター・・・分かったよ」

なのはは頷き迫ってきたダムダム砲を急ぎ上空に舞い上がり回避する。

「ゴツドバアアアアド・チエエエエエンジンジ！！！！」

回避する間に上空でゴツドバードにライディーンはチェンジする。

だが、相変わらず速度は遅い。

これではまた弾かれるのがオチだ。

「ヒヒヒ！無駄な足掻きを！それ、止めにその槍でライディーンを串刺しにしてやれい！」

ベロスタンが命じる。

それに応じるかの様にコーカツが槍をライディーンに向けて構える。

『なのは！今だ！』

「うん、ヘッドカッターアアア！！！！」

なのはが叫ぶ。

するとゴツドバードの頭部部分が突如離脱しコーカツの槍を破壊したのだ。

しかもその速度は本来のゴツドバードよりも速い。

「な、何じゃあれは！」

「凄い、ライディーンにまだこの奥の手があつたなんて」

『ヘッド部分は僕が操縦してる。僕はガンを落とすからなのははコーカツを』

「分かった！お願いね」

なのはは頷く。



\*\*\*

地上に降り立ったライダーはなのはとユーノをその場に下ろす。すると元の待機状態に戻り閃光となって消え去ってしまった。しかし、今なのははそのライダーを見送っている余裕はない。急ぎ先ほどの少女の下へと掛けていく。

「アルフさん！フェイトちゃんは？」

「大丈夫みたい。それよりあんた、凄いよ！」

「ふえっ？」

アルフが太鼓判を押したのになのはが目を点にした。

「だって、あたし達でさえ適わなかったあの化け物を倒しちゃうんだからさあ」

「えっと、私だけじゃないんです。此処に居るユーノ君のお陰でもあるんです」

「えと・・・どうも」

「へえ、イタチが喋るんだあ」

「あの・・・僕フレットなんですけど」

アルフがいきなりユーノをイタチと間違えたのでやんわりと訂正した。  
その時であった。

「おのれ・・・おのれい！」

「あ、貴方は！」

其処には傷だらけになったベロスタンが居た。片腕を抑えてとても痛々しそうである。しかしその目はとても憎憎しげになのはを睨んでいる。

「おのれ小娘！貴様さえ居なければワシはライディーンを倒せた物の・・・せめて貴様だけでも死ねい！」

ベロスタンは持っていた杖を振りかざし魔力を収束させてそれをなのはに向けて放つ。

一瞬、なのはは回避しようとした。

だが、ベロスタンの憎しみの籠った目を見てしまった為に金縛りにあつたかのように動けなくなってしまったのだ。そんななのはの面前に迫る死の魔弾。

「な、なのはあ！」

「え！きやあ！」

気が着いたときには既に魔弾は目の前に来ていた。

一瞬死を覚悟し両腕を顔面の前でクロスさせる。だが、その魔弾はなのはに当たる事は無かった。

「あれ？」

一向に衝撃が来ない事に疑問を感じ目を開く。すると其処には一人の少年が立っていた。

グレーの髪に黒を基調とした重厚な服を纏い手には杖を持っている。

「大丈夫かい？」



## 次回予告

クロノと名乗る少年に連れられて私達はコープランダー隊の母艦に連れてこられました。

そして其処で明かされる30年前の・・・お父さんの戦い。それと同じ頃、海鳴市の沖合いで巨大な建造物が現れたの。いよいよ妖魔帝国が最後の攻撃に移るみたい。

でも、周りには巨大な結界が張られてて入る事が出来ない。ご免ねお父さん。私・・・約束を破らないといけないみたい

次回『禁じられた力』

次回もこの小説にフエエエエエエド・イン！

**蘇れ！不屈の闘志と共に（後書き）**

早いうちに最終回になりそうです  
では

禁じられた力（前書き）

いろいろと原作無視展開です  
まあ元々無視してるから良いか

## 禁じられた力

戦闘を終えたなのは、ユーノ、そしてアルフと言う女性は傷ついたフェイトを連れてクロノの案内するまま一隻の戦艦の中に居た。

「あのお、クロノく・・・クロノ執務官さん、フェイトちゃんは大丈夫なんですか？」

「幸い命に別状はない。もう少ししたら目を覚ますと思うよ」

通路を歩きながらなのはの問いにクロノは答える。

「それから、僕の事は別に気を使わなくて良い。呼び方も執務官とかはつけなくて名前だけで構わないよ」

「あ、はい」

「で、あんた何であたしにも助けってくれたってんだい？」

二人の会話に割って入るかの様にアルフがクロノに問いかける。それを聞いたクロノはチラリとだがアルフを見てまた前を向きながら話す。

「君達は僕達にとっても大事な存在なんだ。ライディーンを扱える存在は僕達にとっても貴重な存在なんだ」

「だから助けたってのかい？」

「身も蓋もない言い方だけどその通りだよ」

アルフの言葉にクロノは頷く。

そうしている内に一同はフェイトの居るであろう医務室の前に辿り着く。

「此処に彼女は居るよ」

「入って、大丈夫かなあ？」

「心配ないと思うよ」

クロノから許可を受けてなのはは医務室の扉を開く。

入った途端独特なアンモニア臭が響く。

学校で良くにおう保健室と同じにおいである。

と言っても余り好きになれないにおいなのは確かだが。

そして目の前に1台のベッドがありその上にフェイトは居た。

「フェイトちゃん！」

「君は……」

フェイトがなのはを見る。

その瞳はうつろになっており元気がない。

無理もない。

巨烈獣との戦いで相当のダメージを負ってしまったのだ。

その衝撃がまだ残っているのだろう。

「あ、私の名前……まだ言ってなかったね。私は高町なのはって

言うの、それでこの子がユーノ・スクライアって言うんだよ」

「え！ユーノ！あなたなの？」

なのはの肩に乗っていたフェレットのユーノを見た途端フェイトが驚く。

「え？知り合いなの？」

なのはがキョトンとした顔をする中、ユーノはなのはの肩から降りてフェイトの面前に立つ。

「お久し振りです。お嬢様」

「ユーノ、まさか、あなたなの？」

「はい、私は貴方の警護をしていたスクライアー族の生き残りの、ユーノ・スクライアーです」

ユーノがそう言うと彼女の前で深く頭を下げた。

「でも、どうしてその姿に？」

「申し訳ありませんでした。私の力が及ばぬ為にお母上様が・・・」

「え？ど、どう言う事？二人は知り合いなの？」

二人の会話に全くついていけないのはが困惑しだす。

「その事については私が説明するわ」

「え？」

声がした。

と同時に医務室の扉が開き、其処には二人の人間が居た。

エメラルドグリーンの長い髪をした女性とクロノと同じ髪型をした男性である。

「艦長、それに副長も」

「ご苦労だったな、クロノ」

男性がクロノにそう言葉を掛ける。

「さてと、それじゃ説明をする前に場所を移しましょうか。立てる？」

女性がフェイトにそう尋ねる。  
フェイトはそれに頷きベッドから起き上がる。

「フェイト、大丈夫かい？」

「平気だよ、もうかなり回復できたから。それで、一体何処で話をするんですか？」

「それにはもう一人人が居るわ。そう・・・30年前にライディーンに乗っていた人の元へね」

\*\*\*

「ベロスタンが死んだ・・・おお、ベロスタンよ・・・何故余に黙って勝手に逝ってしまうのだ」

シャーキンベロスタンの死を嘆いた。

だが、そんなシャーキンの元へバラオの言葉が響く。

『シャーキンよ。いよいよわれら妖魔帝国の立つべき時が来たのだ』

「な、何と！それではいよいよその時なのですね？」

『そうだ。支度をせいシャーキンよ！』

「はっ！おおせのままに」

言葉の主に向かいシャーキンはひざまずき一礼をする。

やがて声がなくなるとシャーキンは立ち上がる。

(間もなく戦いが始まる・・・だが、その前に私はあの男の元へ行く・・・真実を知る為に)

\*\*\*

此処は御馴染み翠屋。

其処になのはは勿論、ユーノ、フェイト、アルフ、そしてクロノ、リンディ、クライドのメンバーが集まっていた。

「リンディ！それにミスターも。随分久しぶりじゃないか」

「久しぶりね士郎君。なのはちゃんを見た時一目で貴方の子だと分かったわ」

「ふっ、あの時はまだガキだったお前も随分と成長したみたいじゃないか」

「ったく、言ってくれませ」

リンディ、クライドと士郎は懐かしく話しをしていた。

だが、やがて話を終えてなのは達の方に戻ってくる。

「お父さん、この人たちと知り合いなの？」

「ああ、この二人・・・リンディとクライドとは過去に・・・30年前に起こった妖魔帝国との戦いで共に戦った仲間なんだ」

「俺はリンディと一緒にブルーガーでお前・・・ライディーンの援

護をしていたんだ」

「ミスターやリンディには何度も助けられたっけなあ」

士郎が懐かしむ。

かつての戦友との再会が何よりうれしいのだろう。

だが、懐かしんでいる場合でもない。

「さてと、それじゃもう本当の事を話しても良いんじゃないのかい？ フェイト・テストロツサ・・・嫌、アリシア・テストロツサちゃん」

「!!!!、どうして私の名前を？」

何故かリンディがフェイトの本名を知っている事に本人は驚く。

だが、それに対して士郎は対して驚いている様子はない。

「リンディは強い超能力を持っているんだ。頭の中を読み取るんなら朝飯前って奴だよ」

「そうですね・・・では隠し事をしても無駄ですね・・・分かりました。全てを話します」

観念したフェイトが全てを話した。

「私は、この世界・・・正しくはこの時代の人間ではありません。貴方の・・・高町士郎様のお母様、レムリア姫と同じ『ムー帝国』の人間なのです」

「な！母さんと同じ時代・・・って事は君もコールドスリープ装置で？」

尋ねてきた士郎にフェイトは頷く。

「ムー帝国は繁栄を極めていました。ですが、突然其処へ妖魔帝王バラオ率いる妖魔帝国が襲い掛かってきたのです。私達は必死に戦いました。ですが敵の力は凄まじくムー帝国は滅亡の危機に瀕しました。」

「それを打破する為にムー帝国の科学者達は総力を結集して勇者『ライダーン』を作ったのです」

「ちょっと待って！ライダーンがムー帝国の科学者達が作ったのはわかったけど・・・何で乗れるのが私とフェイトちゃんだけなの？」

なのはが拳手して質問する。

それには士郎が答えた。

「ライダーンに乗れるのはムー帝国・・・特に王位の血を引く者しか乗れないんだ。つまり俺の母さんであるレムリアの血を俺が引いていたからライダーンに乗れたんだ」

「じゃあ、フェイトちゃんも私と同じようにレムリアさんの娘なの？」

「ううん、私の母さんはレムリア姉さんの双子の妹『プレシア』母さんの娘として生まれたの」

「なに！母さんに妹が居たのか！」

それには士郎は驚いた。

本人も知らなかったのだろう。

「レムリア姉さんと私をコールドスリープ装置に入れた後、母さんは一人バラオから私達を守る為に戦いました。ですが力及ばず・・・母さんはバラオの呪いを受け石にされ・・・今もバラオの側で眠っているんです」

話し終えた後、フェイトの頬から涙が零れ落ちていた。

「フェイトちゃん・・・辛かったんだね・・・お母さんを助ける為にずっと一人で戦ってきたんだね」

「なのは・・・私の為に泣いてくれるの？」

フェイトはなのはを見る。

彼女もまた同じ様に頬から涙が流れていた。  
お互いに共感したのだろう。

「フェイトちゃん・・・じゃなかった！アリシアちゃん！私もアリシアちゃんのお母さんを助けたい！」

「なのは・・・でも、なのはは関係ないよ。これは私の戦いだもん」

「嫌、事は既に次元世界に知れ渡っている。だから僕達コープランド隊が派遣されたんだ。僕達も協力させて欲しい」

クロノが二人の間に入って言う。

「ふと思ったが・・・そいつはお前等のガキか？」

「ああ、生意気な俺の息子だ」

「生意気は余計ですよ、父さん」

クライドの余計な一言にクロノはムツとする。

だが、其処でもう一つの疑問が浮かび上がった。

「ねえ、それじゃユーノ君とアリシアちゃんはどうして知り合いなの？」

「僕の苗字・・・スクライアってのは部族を表すんだ。そしてスクライア一族は代々ムー帝国王族の護衛をしていたんだ」

ユーノは語った。

ユーノの苗字でもあるスクライア一族は古代ムー帝国の王族達の護衛を生業とする一族であり、皆が強い超能力を持っていたのだ。中でもユーノは飛び抜けた存在でありレムリアやプレシア、そしてアリシア達の護衛を任されていた。

だが、バラオとの戦いで勝機を見出せなかったムー帝国は最後の望みを二人に託しユーノは一人バラオに戦いを挑んだ。

『小僧風情が何の用だ？』

『お前を倒し！ムー帝国を救ってみせる！』

剣を片手にユーノは言う。

金色の髪にマントを靡かせるその姿は一族の中でも上位に位置する風格が伺えた。

だが、それを見たバラオが鼻で笑う。

『ふん、誰かと思えばスクライア一族の生き残りか？貴様も我に挑んできた無謀な一族と同じ末路へ送ってやろうぞ！』

『何！それじゃ・・・皆はもう』

『残念ながら骸は無いぞ。我が既に取り込んでしまったからなあ』

バラオは言いながら下卑た笑いを浮かべた。

それに対し、ユーノの肩が震えた。

『父さん・・・母さん・・・皆！仇は討つ！バラオ、覚悟おお！』

！！』

剣を両手に持ちバラオに切り掛かる。

だが、その剣の切っ先をバラオが指一本でとめてしまった。

『ぐ……ぐうー!』

『ふん、小僧風情が生意気だ! 貴様には特別に我からプレゼントを進呈してやるう。我に向かってきたその勇気を称してだ』

そう言うバラオは全身から不気味な色のオーラを放つ。

そのオーラが瞬く間にユーノを包み込んでいく。

『うわああああああああああああああ!』

『フハハハハ! 貴様は今からその醜い動物の姿となり、見ず知らずの世界で細々と生きるが良い! この妖魔帝王バラオを恐れながらなあ! フハハハハハハア!』

薄れ行く意識の中、バラオの笑い声だけが響いた。

そして目を閉じる。

「以上が僕がこの世界に来るまでの経緯です」

語り終えたユーノは周りを見る。

周りでは一層空気が重くなっていた。

特になのはに居たつては「ユーノ君可愛そう」と呟きながら滝の様に涙を流している始末である。

それを見たユーノは冷や汗を掻く。

そんな時であった。

突如店に誰かが入ってきた。

金色のボブカットに細い目つきをした細身の男性である。

「あ、いらつしや……」

「やあ、久しぶりだねえ。 土郎君」

青年が士郎に向かい柔らかい笑顔で手を振る。

だが、士郎は冷や汗を流した。

「や、やあ・・・久しぶりだねえ・・・金吾君」

「え？お父さんの知り合いなの？」

「昔の同級生だったんだ・・・今日はどうしたんだい？」

「たまたま寄っただけさ。それより折角だから二人つきりで話でもしないかい？」

「良いね。すぐ行くよ・・・皆ちよつと待っててくれ」

皆を店に待たせたまま士郎は店を出た。

やがて人気の感じられない場所に着くと士郎は突如目に殺気を込めて金吾を睨む。

「何の用だ？プリンス・シャーキン」

「高町士郎・・・貴様に問いたい。何故ライディーンに乗らないのだ？」

金吾・・・嫌シャーキンは士郎を指差して訪ねた。

それを聞いた士郎は黙り込む。

「貴様は何故あんな年端も行かぬ小娘をライディーンに乗せるのだ？何故貴様は戦わん！臆病風に吹かれたか？」

「・・・戦えたら・・・戦いたいさ」

シャーキンの言葉に士郎は静かにそう返した。

それにシャーキンは言葉をとめる。

「・・・どう言う意味だ？」

「俺の体はもう、ライディーンに乗れるような状態じゃないんだ。

体中傷だらけになってしまい・・・ライディーンは俺を操縦者と認

めてはくれないんだ」

「馬鹿な・・・では、貴様は戦わなかったのではなく、戦えなかったと・・・言うのか！」

士郎は静かに頷いた。

それを聞いたシャーキンは更に驚愕の顔になる。

「では・・・余と貴様の決着はどうなると言うのだ？」

「心配するな。例えばライディーンに乗れなくとも、お前と決着をつける事は出来る」

そう言うと士郎はズボンの中に仕込んでいた仕込刀を取り出しシャーキンに向ける。

だが、それに対しシャーキンは背中を向けた。

「今日は只言伝を伝えに來ただけだ。戦いに來た訳ではない」

「言伝？」

「明日の早朝。我らは此処海鳴市を総攻撃する」

「な！」

「止めたければ來るが良い。余は最下層で待っているぞ」

伝え終わるとシャーキンは風景に溶け込むかの様に消え去っていく。消え去った後の風景を身ながら士郎は手を強く握り締めた。

「シャーキン・・・必ず貴様との決着をつけてやる」

心にそう強く誓う高町士郎であった。

翌日、海鳴市の海岸沖には巨大な要塞が飛来していた。  
妖魔帝国の要塞である。

シャーキンの言ったとおり妖魔帝国は総攻撃をしようとしたのだ。  
その前にはコープランダー隊の母艦である次元航行艦『アースラ』  
があった。

そのブリッジの中で一同は揃い妖魔帝国の要塞を見ていた。

「まさかシャーキンがそれを教えてくれるとはなあ、一体どう言う  
風の吹き回しだ？」

「決着をつけたいのさ。お互いそう思っている。だからあいつは俺  
に教えてくれたんだろう」

呟く士郎を横目でクライドは見る。

士郎とシャーキンはかつて30年前に死闘を繰り広げた中なのだ。  
結果は僅差で士郎が勝った。

シャーキンはその後自決し果てた。

だが、バラオの力により復活を果たしたのだ。

復活したシャーキンの望みは再び士郎と対決し今度こそ勝利する事。  
そのためにわざとシャーキンは情報を流したのだ。

「こうして黙ってみている訳にはいきません。全砲門開け、一斉射  
撃開始！」

リンディが命じ、アースラから無数の攻撃が降り注いだ。

おびただしい量の爆発と爆煙が広がっていく。いったん攻撃を中止し、煙が止むのを待った。煙が止んだ時、其処にあったのは無傷の要塞とそれを覆う分厚い結界であった。

「高密度の結界を確認。肉眼でも確認可能です！」

「ちっ、連中も用意周到って訳か」

「熱源多数！化石獣が出撃しました！その数・・・200体です！」  
「な！200体だと！」

オペレーターはその言葉に一同は驚愕した。

モニターにはおびただしい数の化石獣が迫ってきている。

とてもアースラやブルーガーだけでは対応出来る数ではない。それをなのは、ユーノとアリシア、アルフの四人は見ていた。

このままでは化石獣達に大事な町が蹂躪されてしまう。そんな事は断じてさせたくない。

そう思ったなのは決意を固める。

「ユーノ君、ご免ね！」

「な、なのは！一体何処へ？」

「え？なのは！」

「戻れ！なのは！」

皆の制止を無視してなのははブリッジを飛び出す。そして向かった先はアースラの甲板の上であった。懐から取り出した赤い球体を見る。

「ご免ね・・・お父さん、私・・・約束破るよ」

一人呟き球体を天に翳す。

「なのは!」

「お父さん!」

だが、其処へ父士郎が駆けつけてきたのだ。

「なのは!何をするつもりだ?」

「私がライダーンで戦うの!このままじゃ町が滅茶苦茶にされちゃう」

「駄目だ!あの数に勝てる訳ないだろうが!死ぬ気か?」

「大丈夫だよ。私とライダーンは負けない!だから、安心してお父さん」

「待て、待つんだなのは!」

父の制止を振り切りなのはは球体を天に翳しライダーンを呼ぶ。そしてフェードインしライダーンは青と赤の機体色を持った口ボツトとなる。

「ごめんね、ライダーン。あの技・・・使うよ」

それはライダーンの中に封じられている禁断の武器。

最強にして最大の威力を誇る代わりに操縦者を傷つける諸刃の剣。その名は。

「ゴオオオオオオッド・ボオオオオオオオオオオイス!!!」

なのはが叫ぶ。

するとライダーンの胸に三つのアンテナ状の物が表れる。

それが振動しだす。

そして再び叫ぶ。

「ゴオオオオオオオオッド・ラムウウウウウウウウウウウ！！」

その叫びと同時にライダーの胸から猛烈な波動が放たれた。それらが面前に居る化石獣を一層し要塞の結界すら突き破っていく。だが、そのライダーの中でなのは・・・

「うあああああああああああああああああああ！！」

悲痛の声を上げる。

なのはの声であった。

ゴッドボイスは威力の代わりに操縦者を傷つける武器である。

当時15歳であった土郎でさえ激痛に苦しんだのだ。

若干9歳のなのはにとってそれは地獄の苦しみにも匹敵する物であった。

やがて要塞の結界が破られ要塞が丸裸になった時。

ライダーは糸が切れた人形のようにアースラの甲板に落下する。

そしてボロボロなのはを吐き出し、待機状態に戻ってしまった。

「なのは、しっかりしろ！なのは！」

土郎が吐き出されたなのはを抱え揚げて叫ぶ。

だが、それに対しなのはは全く反応しなかった。

禁じられた力を使った代償・・・それが今のなのはなのであった。

なのは禁じられた力を使い意識不明の重体になってしまった。  
その為なのは抜きでコープランド隊はアリシアの操るライディー  
ンと共に妖魔帝国の要塞に突入した。

しかし、其処には妖魔帝王バラオと最後の巨烈獣が待ち構えていた。  
苦戦するライディーン。

果たしてなのは間に合うのか？

そして世界の運命は？

次回『最終決戦』

次回もこの小説にフェエエエド・イン!!!

## 禁じられた力（後書き）

重症を負ったのは。

そして正体を明かすフェイト。

果たして妖魔帝国との戦いの結末は？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4237p/>

---

魔法勇者ライダーン

2011年11月17日11時42分発行